

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク : 新しい 言語研究への道

山本, 文明

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

307

(発行年 / Year)

2008-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004513>

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク

——新しい言語研究への道——

Rasmus Rask, a tragic linguist
——the road to new linguistic research——

山本文明

YAMAMOTO Fumiaki

（拙稿は「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」（『異文化』6）および「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——大学入学直後——」（『異文化』7）に続くものである。）

グロントヴィとの確執はさらに続いた。それは、1810年、グロントヴィが『古エッダ』あるいは『詩のエッダ』と呼ばれる古いアイスランド文学の一部の試訳を発表した時のことであった。『古エッダ』は、中世文学として価値があるばかりでなく、資料の少ないゲルマン人の神話に関するきわめて貴重な資料である。グロントヴィの翻訳は、言語に厳密なラスクにとっては、間違いだらけであった。ラスクは、すぐに『コペンハーゲンの最新実像』（*Nyeste Skilderie af København*）第34号に、「『実像』第30号のエッダの翻訳についてのコメント」（“Nogle Betænkninger om den i Skildriet no. 30 lovede Oversættelse af Edda”）と題する批判を書いたのである。ラスクは、グロントヴィの翻訳は、不完全で誤訳があること、デンマーク語の訳語が不適切なこと、行き過ぎた単語の入替えがあること等を指摘した。要するに、ラスクには、グロントヴィの翻訳では原典の崇高な素朴

さが損なわれていると感じられたのであった。ラスクは、さらに『実像』36号では、「これはすべてグロントヴィ氏の仕事を妨げたり、過小評価するものではありません。(中略)私は、ここでは、重要と思われ、出版の前にやった方がいいと思われる改善点の手がかりをお示ししたいだけです。つまり、もう少しアイスランド学を利用すること、もう少しデンマーク語のいいまわしを簡潔で自然にすること、最後に、もう少し韻律法に統一性を保つことです。」(キャステン・ラスク『ラスムス・ラスク：小さな国も大きな思想家』、p.57)というコメントを掲載した。

ラスクの批判に対して、グロントヴィは、同じ雑誌の中で、誤訳があることやラスクの提案する訳語の方がいいものもあることを認めた上で、自分の訳は試訳であり、読みやすいように詩を再現したものであると答えた。グロントヴィは、ラスクの方が年下であるにもかかわらず、教師が生徒を叱るような態度、高いところから見下ろすような態度に不快感をもったようであるが、ラスクは、自分はグロントヴィとは次元が違うといわんばかりに、以後は公にはこの問題に触れることはなかった。ラスクの批判は的を射ていたものの、その好戦的とも思える態度が、エーレンスレイヤーの場合と同様、ラスクの世間的な評価を高めることにはならなかった。

ここで、ラスクのコペンハーゲン大学入学前後のデンマークが置かれた状況をふり返ってみたい。ラスクがコペンハーゲン大学で学び始めたのは1808年のことであったが、この年には、デンマーク王クリスチャン7世が他界し、その皇太子フレゼリクが王位を継承し、フレゼリク6世(Frederik VI)(在位期間：1808-1839)となった。クリスチャン7世の治世は1766から1808年までで、表面上は長い間王位にあった。しかし、実際には、クリスチャン7世は重度の統合失調症のため、直接に政治に係わることはほとんどなかった。彼のも

とに15歳でイギリスから嫁いだキャロリン・マティルド (Caroline Mathilde) は、17歳のときに後のフレゼリク6世を産んだものの、孤児を守ることを余儀なくされたのである。女性としての幸せを求めるマティルドが、王の主治医としてそばに仕えるA.J.F. ストルーエンセ (A.J.F. Struensee) と恋愛関係に陥ったのは仕方のないことかもしれない。ストルーエンセは、政治家としても有能さを発揮し、デンマークの政治を動かすほどになったが、結局、二人の関係は告発されるところとなり、1772年、ストルーエンセは処刑され、マティルドは一時クロンボー城にも幽閉され、ドイツで生涯を終えたときにはまだうら若き23歳であった。マティルドが皇后の地位を追われたとき、皇太子フレゼリクはまだ4歳であった。

ストルーエンセの後を受け、デンマーク政治を主導したのは、フレゼリク5世の2度目の妃、即ち、クリスチャン7世の継母、ユリアーネ・マリーエ (Juliane Marie) の庇護を受けたO. グルベア (O. Guldberg) であった。幼くして母を失い、精神を病む父王のもとに残された皇太子が孤独と鬱屈した幼年時代を送ったことは想像に難くない。1784年、皇太子は閣僚会議の席で決起し、事実上父王を排除し、摂政となった。それは皇太子が16歳のときである。席上、ユリアーネ・マリーエは、皇太子をを口汚くののしったといわれている。グルベアは失脚し、代わって、皇太子を支え、政治の主導権を握ったのは、A.P. ベアnstorf (A.P. Berstorf)、E. シメルマン (E. Schimmelmann)、Ch.D. レーヴェントロウ (Ch.D. Reventlow) らであった。クリスチャン6世、フレゼリク5世、クリスチャン7世と続く宮廷の公用語はドイツ語であり、ユリアーネ・マリーエもドイツ人であった。摂政となった皇太子を新しく支えることになった彼らは親の代からの有力者の家系で、ベアnstorfとシメルマンはドイツ人であった。当時のデンマークではドイツの影響が依然として強かったことが容易に推測される。しかし、レーヴェントロウはデンマーク人で、デンマーク語とド

イツ語のバイリンガルであったが、宮廷でのデンマーク語の地位を高めるのに貢献した。

1776年のアメリカ合衆国の独立宣言は、デンマークではほとんど注目されなかった。それはアメリカ合衆国という新しく巢立とうとする国の認知度がヨーロッパでは低かったからであるが、アメリカの独立戦争中の物資の調達・輸送という点で、この戦争は、通商的には、デンマークに恩恵をもたらした。とくに、コペンハーゲンは交易のための港として重要性を増した。イギリスは、フランス、オランダ、スペインと対立関係にあったが、デンマークは、同じ海運国のイギリスとの摩擦を回避する意図もあり、中立政策を採っていた。

しかし、商船の保護のために軍艦がともに航行し、世界中の通商には積極的であった。この政策は、外務大臣のベアnstorfが推し進めたものであったが、大国の間隙を縫って、成果を収めていた。とくに、1789年にフランス革命が起こると、デンマークの海運はますます盛んになり、1790年代のデンマークの交易量は、イギリス、フランスにつぐ規模まで拡大した。このことは、革命後のフランスを封じ込め、ヨーロッパの制海権を確保したいイギリスにとって面白いことではなかった。イギリスはその表われとして、デンマーク船の臨検を要求した。

これに対して、デンマークは、すでに述べたロシア、プロイセン、スウェーデンとともに武装中立を守り、イギリスの臨検を拒絶したのである。この結果が1801年のイギリス海軍によるコペンハーゲンの攻撃であった。デンマークは、中立同盟を抜け、1807年まではイギリスを刺激することなしに、自国の交易の活性化に邁進することができた。ところが、1807年、ナポレオンはドイツを占領すると、イエナ会戦で破ったプロイセン、ロシアとティルジット条約を結び、イギリスを封じ込める取り決めをし、依然として中立国であったデンマー

クにも圧力をかけるようになった。

イギリスは、逆にフランス封じ込めの一環として、フランスの手に落ちることを懸念して、デンマークの艦隊をイギリスに引き渡すことを要求した。ウェリントン公爵率いるイギリス軍は、コペンハーゲン近郊に上陸し、砲撃を開始した。結局、デンマークの艦隊はすべてイギリスに拿捕され、デンマークの海軍力は無力化した。デンマーク近辺の水域の実権は完全にイギリスに掌握されてしまったのである。このようにイギリスから一方的に圧迫されたデンマークが、イギリスと敵対するフランスと同盟関係に入ったのは自然な流れであったが、以後のナポレオン戦争では、デンマークはフランスとともにイギリスと戦う羽目になり、歴史の流れに逆行することになったのである。

デンマークは、スウェーデンも同盟に引き込みたかったが拒否されたため、しかたなく1808年の3月、スウェーデンに宣戦布告することになった。デンマークと同様に中立を守っていたスウェーデンは、大国間の力関係の中での生き残りに悩みぬいた挙句、1805年にイギリスと手を結んでいたが、フランスと結んだロシアに、当時スウェーデン領だったフィンランド侵攻の口実を与えることになった。1809年、フィンランドはロシアに占領され、割譲を余儀なくされた。以後、フィンランドを失ったスウェーデンの、代替的な領土拡張の関心は、デンマーク支配下のノルウェーに向けられることになった。

1812年、ナポレオンはロシア大遠征に失敗し、ナポレオン戦争は急速に終結へと向かう。イギリス、ロシア、スウェーデンの同盟軍に対し、フランスと同盟したデンマークはきわめて不利な立場に立たされることになった。しかも、デンマークの国家経済は完全に破綻し、1813年には新しい金融システムの下に再出発をしなければならなくなった。そして、1814年のキールにおける講和では、デンマークはノルウェー全土をスウェーデンに割譲することを認めざるを得なかったのである。

ここに、カルマル同盟以来4世紀、デンマークとともにあったノルウェーはスウェーデンの支配下に置かれることになった。デンマークは、ヴァイキング時代からの固有の領土であったスカンディナヴィア半島のハラン、スコーネ、ブレーキンゲに続いて、ノルウェーまでもスウェーデンに奪われた。こうして、つぎつぎと領土を奪われたデンマークのスウェーデンに対する怨念は、拭い去ることができないものとなったのである。デンマークにとって唯一幸いだったのは、アイスランド、フェーロー諸島、グリーンランドは、デンマーク領として残されたことであった。以上のような状況下のスウェーデンに対する最悪の国民感情と破綻した経済の中で、ラスクはコペンハーゲンでの慣れない研究生生活を送っていたのである。

人間関係に傷つき、経済的にも十分な支えがなく、古い時代の北欧の資料にも限界があり、ラスクはコペンハーゲンでの研究生生活に満足できないでいた。そのようなときにもち上がったのが、スウェーデンへの調査旅行の話であった。1809年の講和の後、大学図書館司書ニュロップはスウェーデンとノルウェーの古い資料の調査に出かけることを計画し、その旅行にラスクを伴おうと考えたのである。『スノリのエッダ』（＝『新エッダ』）の刊行に際して、ラスクの助力を得、序文でその能力を絶賛したニュロップは、ラスクの可能性を伸ばすためにも、調査を充実させるためにも、同伴を試みたのである。

スウェーデンのストックホルム郊外のウプサラ大学（Uppsala universitet）には、デンマークの王立図書館にあるエッダの写本、『王の写本』（Codex Regius）とは異なる写本があり、出版もされていたからである。その写本を調べ、原型に最も近いアイスランド語の稿本を刊行したいと思っていたラスクにとっては、これは得がたい機会であった。コピー機のない当時の写本研究の基礎は、まず写本を自分で書き写すことから始まったが、ラスクはデンマークでは入手できない

写本の魅力に強く引きつけられていた。ラスクは、ニュロップを手伝って、1808年に『スノリのエッタ』のデンマーク語訳を出していたが、ラスク自身は、『スノリのエッタ』の稿本の公刊を望んでいた。そのためには、ウプサラ大学の写本はどうしても見ておきたいものであったのである。

ニュロップは、王立遺跡保存協会に自分とラスクの二人分の旅費と費用を請求した。しかし、協会の返事は二人分の長期旅行の予算はつけられないというものであった。すでに述べたように、国家経済が破綻しかかっていることも理由のひとつであったろうが、ラスクがまだ一介の若い神学生の身分に過ぎず、学問的評価が定まらなかったことにもよると思われる。苦しい国家財政下で、学問的将来の未知な学生に先行投資する余裕はなかったということであろう。あるいは、エーレンスレイヤー批判、モルベック、グロントヴィとの摩擦が尾を引いていたのかもしれない。

ラスクは、この後すぐに支援者のビュロウに、希望していたスウェーデン行きが断られた旨を知らせた。ビュロウは支援を惜しまないとの返事をよこしたものの、少々の支援ではなく、すべての費用の援助がないかぎり、ラスクには、スウェーデン行きを実現することは不可能であった。ラスクが、もっと懸命にビュロウに訴えれば事態も変わっていたかもしれないが、ラスクはそうはしなかった。おそらく、ラスクとビュロウの関係はまだそれほど深まっていなかったということもあったであろう。かくて、最初のスウェーデン行きの計画は不首尾に終わったのであるが、ラスクは、落胆はしたものの、事実を冷静に受け入れていたようである。

このことに関しては、ビエロムは「なぜラスクは1810年にスウェーデンに行かなかったのか?」(“Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?”)という論文で、ラスクがスウェーデンに行けなくなった事実を冷静に受けとめたことについて、とくにビュロウとの手紙のやりと

り等を基に、非常に興味深い見解を述べている。それは、エッダの稿本を出版するよりも、ラスクの心をもっとしっかりと捉えていたことがあったからだというのである。それはアイスランド語文法の公刊であった。

アイスランド語の文法が出版されたのは1811年だが、このスウェーデン行き話がもち上がっていたころは、まさにこの文法の構想を練り、執筆にとりかかっていた時期だったのである。つまり、そのときのラスクの関心は、エッダの稿本よりむしろアイスランド語文法の方であったのである。もしスウェーデン行きが実現し、エッダの稿本の仕事にエネルギーを割かなければならなくなっていたとしたら、その方面での学術的進歩はあったかもしれないが、アイスランド語文法をととしての言語学の進歩という点でもラスクの学問的展開という点でも、マイナスになっていたかもしれない。この文法が、ラスクの生きる方向を決定づけたばかりでなく、比較言語学の誕生のための重要な一里塚となったことを考えれば、このときのスウェーデン行きが実現しなかったのは、むしろ好都合だったと考えるべきであろう。運命の不可思議でもある。

1811年刊のラスクのアイスランド語文法『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』(*Vejldning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*)は、初めてのアイスランド語の学問的な文法であったが、ラスクはその構想をオーゼンセのラテン語学校・大聖堂学校時代にすでにもっていた。アイスランド語の構造は10代のラスクの頭の中で、早くも組み立てられていたのである。しかも、専門的な文法がそれまでに存在していなかったということ、つまり、参考に値する文法がなかったということは、このアイスランド語文法は、まったくラスクの独創であったことを意味する。

この文法は、序文が51ページにのぼるが、その冒頭のパラグラフ

はつぎのようである：「デンマーク国民の祖国愛と自尊心が倍加しているように思われ、多くの優れた学者たちがわれわれの祖先の業績、組織、思考を、価値ある見地から、伝えようとし、デンマークで最も偉大な詩人たちでさえ祖国の往時の交易を不滅の作品の中で謳い上げ、デンマーク語が大きな注目を集め綿密に研究され、その上、政府が、往時の遺物とその保存と解釈に腐心しているまさに今、われわれの祖先の古ノルド語の構造と組織、言い換えれば、アイスランド語文法、を記述する試みに長たらしい弁解は不要であろう。この試みは、成功すれば、上記のすべてについて、最も決定的な有益性と重要性をもつのである」。

ラスクは、かつての領土をつぎつぎと失い、国力の低下と経済の破綻の危機に立たされている祖国デンマークが、誇りを取り戻そうと懸命にあがいている中で、アイスランド語の研究が、すべての歴史研究に役立つものであるということを強調しているのである。このころは、デンマーク文学史では、前期ロマン主義の時代（1800-1820）に分類され、その代表的詩人エーレンスレイヤーは『黄金の角杯』（*Guldhornene*）（「黄金の角杯」とは、5世紀頃の製造と推定される、ユトランド南部で発見された大小2個の角の形をした金製の酒盃のこと）や前述の『善なる者バルドル』を始め、古代北欧の文化や北欧神話を題材とする詩を書いていた。また、エーレンスレイヤーは、北欧神話をモチーフにしたデンマーク国歌も作詞している：「愛おしい国がある / 潮の香りのバルト海にほど近く / ブナの木が枝を広げる / うねりは丘となり谷となる / それは古のデンマーク / フレイヤの広間」（なお、フレイヤ（Freyja）は北欧神話の愛、豊穡、戦の女神で、「フレイヤの広間」とはセスルームニル（*sessrúmnir*）と呼ばれ、戦士たちが憩いを取り、つぎの戦に備えた美しい広間のこと）。国威高揚のために、国歌の必要が叫ばれた時期であった。ラスクは、そのようなロマン主義思潮の中で、言語学の立場から、デンマークが往時の

繁栄と栄光を再び手に入れるために、また、失意のどん底にあるデンマーク国民を元気づけるために、北欧の繁栄の象徴であったアイスランド語の研究の必要性を懸命に説いたのである。ちなみに、イェルムスレウは「ラスクの生涯と業績についての論評」(1951)で、「青春時代には、ラスクはロマン主義の影響を受け、熱狂的にスカンディナヴィアの古い文化と、エッダとサガの栄光ある言語の研究に没頭するにいたった。しかし、ラスクは徐々にこの影響から脱した。(中略)生来、ラスクは合理主義者であり体系家であった。生来、彼はロマン主義者でも歴史家でもなかった」(p.14)と述べている。北欧の歴史と結びついたロマン主義の流れを脱し、生来の合理主義を貫くようになるラスクの生き方は、キリスト教に合理主義の立場から疑問をもち続けた生き方と重なり合う。

デンマークは古くから大国ドイツの影響下にあり、デンマーク語も多くの語彙を低地ドイツ語(デンマークのユトランド半島が地理的に接しているドイツ北部の方言)から、借用してきた。ラスクから見れば、デンマーク語は、その初期の段階ですでにドイツ語の影響が見られ、言語としての純粋性は失われていたが、一方、アイスランド語は、ノルド語本来の純粋さを保持し続けていた。ラスクは、アイスランド語を研究すれば、失われた国家的威信を回復できると同時に、デンマーク語の原初的な状態、すなわち、北欧の言語の純粋な起源にたどりつくことができると考えたのである。

この『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』の本文は、全体で282ページから成る。その第1章は、音論で、綴りと発音の関係が詳細に示され、さらに後半では、アイスランド語とデンマーク語の音の対応が扱われている。ただし、古ノルド語を意識しながらも、発音は、古ノルド語ではなく、現代アイスランド語にしたがっている。例えば、綴りのæの発音は、国際音声字母に直して表記すると、古ノルド語では[æ:]、auは[ɔu]であったと想定されているが、ラスクは、それ

ぞれに現代アイスランド語の発音 [ai] と [öy] を充てている。ラスクは、用例として用いるとき、しばしば古アイスランド語 (= 古ノルド語) と現代アイスランド語の区別を意識しないで用いることがある。言語の比較は、できるだけ時代的に古いもの同士で比べるのが通例であるため、このラスクのやり方は批判されることもあった。しかし、生きた化石のように、文法の時代的变化がほとんど起らなかったアイスランド語は、ラスクにとっては、古アイスランド語と現代アイスランド語とに区別する必要のないものだったのである。

この音論で注目すべきは、イエスベルセンもそのラスク伝の中で指摘しているように、ウムラウトの概念を明確に導入していることである。例えば、アイスランド語の単語 blað「葉、刃」(英語の blade と同語源) の変化は、単数では、主格 blað、属格 blaðs、与格 blaði、対格 blað、複数では、主格 bløð、属格 blaða、与格 bløðum、対格 bløð となるが、なぜ語幹の母音に a > ø の変化が起っているかを説明しているのである: 「この変化の仕方では、アイスランド語の母音変化の理由が明確に分かる。すなわち、語中の母音はできるだけ語尾の母音に一致させられるということである」(p.45)。ラスクは、語尾の音節にある母音 u の影響で直前の語幹母音 a が u に近い ø に変化させられたと考えたのである。つまり、これが今日一般に認められている u-ウムラウトという現象だが、ラスクは続けてつぎのように述べている: 「この u は、現在のアイスランド語の語形中には後続しないが、おそらくはるか以前に第二変化 (blad の属する変化) の複数の主格・対格で発音されていて、明らかに a が ø になる理由となっている」(p.45)。

このことに関しては、イエスベルセンは、ラスク伝の中で、「したがって、彼 (= ラスク) は、ウムラウト (u-ウムラウト) の存在をはっきりと見とおしていたが、この用語は用いてはいない」(p.14) と述べ、はるか昔は存在していた語尾の母音が語幹の母音を変化させ、変化を

引き起こした後で、影響を与えた語尾の母音それ自体がなくなったということ、この時点でのラスクの頭の中にあったことを認めているのである。今日では、言語学界の共通認識とはいえ、当時としては存在しない母音の影響に気づくことはきわめて新しい発見であった。なお、この現象にウムラウトという名称を与えたのは、グリムであった。グリムは、1812年の『アイスランドあるいは古ノルド語入門』の書評で、「彼(＝ラスク)は、それ(格変化に現われるウムラウトの原因)を、語尾の母音と語幹の母音の確かで、必要な一致に求めようとし、語幹の音は語尾の方向に向かうとしているが、むしろ、その方向はまったく逆であろう」(p.518)と批判したが、イエスベルセンは、ラスクの「明らかにアイスランド語の本質に反する」とした反論の手紙(1812年9月22日付)の一部を引用している。この手紙自体は、グリム兄弟に宛てたものだが、この部分は実際には兄のヤーコブ・グリムに対するもので、もう少し前段の文章を引用すると以下のようである：「あなたが語尾の母音は単語の[語幹]母音にしたがって変えられ、その逆ではないと考えたいとおっしゃるのなら、それは明らかにアイスランド語の本質に反しています」。この件に関しては、明らかにラスクの主張の方が正しかった。1976年にラスクのアイスランド語文法の新版を出したT.L. マーキー(T.L.Markey)(G.W.Dasentが、スウェーデン語で出版されたラスクのアイスランド語文法を、1843年に英訳し、解説・参考文献・注を付けたもの)によれば、グリムは、1816年11月19日付のドイツの言語学者G.F. ベネッケ(G.F.Benecke)(1762 - 1844)宛の手紙で、ラスクの見解を認めて、その解釈にしたがうと述べている(p.XXXII)。しかし、皮肉なことに、言語学用語としては、グリムが命名したウムラウトが後世に残ることになった。

第2章は、単語の語形変化を扱う形態論で、まず名詞の種々の格変化を示した後、冠詞が後につくノルド語特有の変化形を示している。アイスランド語が屈折語であることはすでに述べた。これは、以前に

も若干触れたが、名詞が、文法的な性、数、格に応じて語形変化をするということである。性は、男性、女性、中性の3つがあった。数は、単数、両数、複数の3つがあった。格は、主格、対格、属格、与格の4つがあった。

特筆すべきは、ラスクは、文法的な性・数・格の語尾の変化表を示すに際して、伝統的な男性、女性、中性という順番に対して、中性、男性、女性の順番を選択したことである。今日のヨーロッパの諸言語の文法で用いられている用語は、masculinum (=男性)、femininum (=女性)、neutrum (=中性) というラテン語が基本となっているが、このうち neutrum は「どちらでもない」という意味で、「男性でも女性でもない」ことを表わす文法用語である。つまり、伝統的な文法観は、名詞を男性と女性に分け、どちらにも属さないものを中性と考える3分法であった。ラスクは、そのようには考えなかった。

ラスクは、このアイスランド語文法の中で、語形の点で「中性の変化が最も単純である」(p.29)として、単純なものを基準にしたのである。ここで我々は、文法構造を客観的に形式からとらえる、ラスクの思考方法の一端をうかがい知ることができる。文法的性の3分法には異論がある。生物を男性と女性に分け、無生物と対立させる考え方に対して、元々、自然界の生物と無生物を、言語に反映したと考える文法的性の2分法である。インド・ヨーロッパ語族で最も古い資料を残しているヒッタイト語ではまさにこの2分法が用いられている。ヒッタイト語では、共性 (=生物) と中性 (=無生物) が対立しているのである。原初的には、こちらの方がはっきりしているように思われるが、ヒッタイト語文法として評価の高い、J. フリードリヒ (J. Friedrich) (1893-1972) の『ヒッタイト語入門』(*Hethitisches Elementarbuch*) に代表されるように、共生は古い男性と女性が合わさったものだという解釈が一般的であった。ラスクが、伝統にとらわれずに、純粹に形の単純な中性をまず出発点にしようとしたことは、言語習得という観点か

らも、注目に値するが、発生的にも、中性に最も古い要素が残っていると考えたのである。中性を3つの性の最初に置く記述法は、グリムによる1812年の書評で、「中性の前置：女性が先行し、男性つぎに中性が後に続くか、もっと好ましいのは、順番は男性・女性・中性となるべきであった。」(p.520)という批判にさらされることになるが、ラスクは構造的かつ教育的に、中性を3つの性の最初に位置づけることに終生こだわり、以後の文法書でもすべて一貫してこの方式を採用している。

ただし、ラスクは、1811年の文法では、語尾の一覧表では中性、男性、女性の順に並べたものの、実際の形容詞の変化形を示す際には、読者が見慣れているという理由で伝統的な男性、女性、中性の順を採用している。このころはまだ自説を強く主張する自信がなかったのであろうか。しかし、1817年の古英語文法以降は、首尾一貫して、形容詞の変化表もすべて中性、男性、女性の順で示すようになる。自説の正しさを積極的に主張するようになったのである。この文法的な性に関しては、ラスクの語形の単純なものを基準にするという考え方は、現在までのところ言語学界の認めるところとはなっていない。

名詞の項では、主として、屈折語であるアイスランド語に不可欠な、今日の英語の主格、所有格、目的格やドイツ語の1格（主格）、2格（属格）、3格（与格）、4格（対格）等に名残りをとどめている、格変化を扱っている。古英語の時代には、1人称・単数の人称代名詞は、主格 = ic、属格 = min、与格 = me、対格 = me と格変化し、基本的には、主格は主語、属格は所有、与格は間接目的語、対格は直接目的語を表していたが、現在では与格と対格が融合して目的格と呼ばれるようになっている（その結果、現代の英語には、主格 = I、所有格〔属格〕 = my、目的格 = me として残っている）。古英語やドイツ語と同様、アイスランド語も、古ノルド語以来、4つの格を有し、格変化で文中の要素間の文法関係を表わしていたのである。

この名詞の格変化を示す順序は、現在の言語学では、主格、対格、与格、属格の順に並べるのが一般的となっているが、1811年のアイスランド語文法では、古くから行われてきた主格、属格、与格、対格の順を採っている。ラスクの考えの根底にある語形の単純性という点から考えれば、主格と対格に共通性が多く、とくに中性では常に主格と対格は同形であるのだから、主格のつぎに対格を置く方が合理的であるはずである。このことに関しても、ラスクは1817年の古英語文法から主格、対格、与格、属格の順に修正している。

つぎに、形容詞の格変化、数詞、代名詞、動詞が続くが、動詞は、第1活用として弱変化動詞（規則変化動詞）、第2活用として強変化動詞（不規則変化動詞）に分類され、第2活用は5つのパターンに分類されている。強変化動詞とは、ゲルマン諸語で、(1) 不定詞、(2) 直説法・過去・単数、(3) 直説法・過去・複数、(4) 過去分詞の語幹の母音が変わる(=交替する)動詞のことをいう。例えば、現在の英語のsing「歌う」は、過去 sang、過去分詞 sung のように不規則な変化することが知られているが、古英語では、不定詞 singan、過去・単数 sang、過去・複数 sungon、過去分詞 sungen と変化していた。現在の英語では、過去・単数形が過去・複数形の役割も果たすようになっているが、古英語の語尾を取れば、語幹の母音の交替は現在でも生きていることが分る。

ラスクが強変化動詞を5つに分けた基準は不定詞と過去形の母音の交替に注目したのだが、今日から見るとまだ未完成の感がある。ラスクは1817年の古英語文法および1818年のスウェーデン語版による改訂版でこの分類法を修正することになるが、このことについては後述する。

第3章は、語形成を扱い、接頭辞、接尾辞を解説している。第4章は統語論、第5章は韻律論、第6章は言語の変種、方言となっていて、全体の構成は、すでに現代の諸言語の文法と大差はない。このアイスランド語入門の中で、とくに注目に値するのは、第1章の音論と第2

章の形態論であろう。今日でも光を失わないラスクの才能のひらめきを感じられるのは音論と形態論においてである。これらは、ラテン語学校時代からラスクの頭の中で練りに練られ、このとき初めて世に問うことになったのである。

『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』の影響は極めて大きい。ラスクのこの文法によって、デンマークばかりでなく北欧全体で、アイスランド語への関心が飛躍的に深まったことはいうまでもないが、学問的にも、文法の記述がほとんど今日のレベルまで高められたのである。しかし、ラスクはこれだけでは満足しなかった。この文法に対するまわりの反応のうち、受け入れるべきものは受け入れ、修正を加えて、さらなる記述の充実を目指すことになる。

ラスクの文法の根本思想は、言語を自然科学のように客観的に記述し、分類し、比較することであった。ラスクの模範となったのは、同じ北欧の先達、「分類学の父」とも呼ばれるスウェーデンの博物学者、植物学者 C. フォン・リンネ (C. von Linné) (1707 - 78) であった。ラスクは、リンネが多くの植物を採取し、客観的に分類した方法論の影響を受けた。できるだけ多くの言語を身をもって習得し、それらの文法構造を同じ方法論に基づいて記述し、でき上がった文法を基に言語を分類し、比較すること、これがラスクの目指したものであった。小さな修正はあるものの、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』の記述の仕方は、ラスクが書いた多くの言語の文法の基本となるものであった。その意味で、この文法は、ラスクの言語研究のきわめて重要な出発点となったのである。

この当時のデンマークは、何度かの戦争のせいで固有の領土をスウェーデンに取られ、国民はスウェーデンに対して深い怨念を持っていたということはすでに述べた。そのような状況下で、なぜ祖国の復興と繁栄を願うラスクが、スウェーデンの植物学者の分類学を模範としたかという点に疑問が残るかもしれない。この疑問に対する解答は

はっきりしている。ラスクの思考形態はもっと柔軟で、学問的に純粹であったとのである。ラスクは、北欧全体を、文化的には、ひとつの共同体とみなしていた。ラスクの考えは、かつて繁栄していた北欧は、アイスランド語に残る北欧文化を支えた共通の言語をもち、そこからデンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語あるいはフェーロー語が分岐してきたのだから、往時の共通の言語すなわち、アイスランド語の研究のためには、北欧の内部的領土の争奪などは大きな問題ではなかったのである。このラスクの姿勢は、後のスウェーデンへの旅行や滞在で、如何なく発揮されることになる。

さらに、この文法に関して、特筆しなければいけない点がもうひとつある。それは、使用言語がデンマーク語であったという事実である。当時の学術書は、中世以来の伝統に従って、ラテン語で書かれることが多かった。上記のフォン・リンネの著作も、ヨーロッパの共通の学術語、ラテン語で書かれている。あるいは、ラテン語でなければ、フランス語やドイツ語のような、当時のヨーロッパの大国の言語が用いられることが多かった時代背景を考えれば、北欧の小国、デンマークの言語で書くにはそれだけの理由があったはずである。ラスクは、自然科学的な分類法という点では、同じ北欧のリンネの学問的方法論を評価していたが、それを表現する媒体としての言語に、ラテン語を選ぶことには賛成できなかった。

ラスクは、序文の中でつぎのようにいっている：「この本がラテン語ではなくデンマーク語で書かれていることを、重大な欠陥だと考える人もいるかもしれないが、これには重要な理由がある。ラテン語で文法の本を書くほど易しいことはないし、デンマーク語以外の言語で書くこともたやすい。この本では、美文を求めたり、専門用語を捜し求めたりする必要はないし、新奇なもので読者をおどろかせる必要はさらにない。しかし、易しく簡単ならば、それだけわが国の文学や言語の普及にとっては危険なことなのである。われわれが、外国人が興

味をもち読む必要があるものを、すべて外国語で書けば、彼らはわれわれの母語を学びたいと思うだろうか」(p.LI)。ラスクには、北欧のため、祖国のためという意識が強かった。デンマーク語で、アイスランド語の文法を書くことによって、外国人もデンマーク語を媒体に、アイスランド語を知るようになることを願ったのである。

ドイツ語についてのラスクの見方が分かる手紙の一節がある。それは、1811年8月20付のグリム宛のもので、ラスクのグリム宛の手紙としては、イェルムスレウ・ビエロム編の書簡集ではこの手紙の日付が最も古い。ラスクは、「私がすべてにおいてあなたと意見が一致しているわけではないとしても、語調が、物事を熱っぽく語るときに起こりやすい、厳しさを帯びたとしても、あまり悪くは思わないでいただきたいのです」と前置きした上で、「ドイツ語とデンマーク語の論争については、ドイツ語がこの言語グループ(=ゲルマン語)の中で最も優勢であるというお考えはよく理解できません。どうしてドイツ語がイギリスで英語より優勢で、アイスランドでアイスランド語より優勢で、スウェーデンでスウェーデン語より優勢で、ノルウェーとデンマークでデンマーク語より優勢なのでしょう。このデンマークでは、かつてドイツ語を話すことが名誉だと感じられた時代があったことは私もよく知っていますが、そんな時代はすでに過ぎ去り、分別ある社会ではむしろそのことを恥じています。(中略)スウェーデン語とデンマーク語はずっと以前から権威と独立を達成していますから、私の考えでは、ドイツ語の支配下にあるなどとはいえないのです。(中略)私としては、ドイツ語をデンマーク語の下に置いたり、デンマーク語をドイツ語の下に置いたりするつもりはありません。それぞれの言語には長所と短所があります。それ故、デンマーク語にはドイツ語より優れた点が当然たくさんありますが、ドイツ語にもデンマーク語より優れた点があることを私は喜んで認めます」。ラスクは、グリムのドイツ至上主義をどうしても容認できなかったし、ス

ウェーデン語やデンマーク語の独立性、さらにいえば、ノルド諸語の独自性を主張したかったのである。グリムの『ドイツ文法』(*Deutsche Grammatik*)は、文字どおりのドイツ語の文法ではなく、ゲルマン語の枠組みの中でのドイツ文法であることはよく知られているが、ラスクは、そのようなドイツ語をゲルマン語の代表的な、象徴的な言語と考えるグリムの言語観に厳しい異論を唱えたのである。

ラスクは、このように主張することによって、ドイツ文化の影響が強かった当時のデンマークで、デンマーク語はドイツ語と同等の言語であることを声高に叫び、「権威と独立を達成して」いる祖国の言語に対する誇りを表わしている。ラスクと同じ時代の空気を吸った S. キャケゴー [キェルケゴール] (S. Kierkegaard) (1813-55) は、『あれか、これか』(*Enten-Eller*) の終わり近くで「私は祖国を愛しており、どこかほかの国では幸せに暮らせないと思う。私は、私の思想を解放してくれる母語を愛している。私がこの世でいいたいことは、母語で完璧に表現できることを知っている。」(K. Hansen. *Søren Kierkegaard: Skrifter i Udvalg*, p.73) と述べている。ラスクがグリムに代表されるドイツ的な言語観に反発したように、キャケゴーは、当時デンマークで流行していたヘーゲル主義への批判をこめて、ドイツ語でなくても哲学が語れることを実践し、証明しようとした。二人の薄命の知識人は、19 世紀前半のデンマークのロマン主義とナショナリズムの象徴でもあったのである。

つまり、ラスクは、当時の言語学界で抵抗なく受け入れられるであろう、学術の共通語としてのラテン語や当時の大国の言語であるドイツ語やフランス語を拒否し、北欧の小国の言語、デンマークを選択したのである。ラスクの学問的な悲劇性のひとつが、デンマーク語で著作や論文の多くを発表したことにあるだけに、ラスクの祖国愛の空回りは、ラスク自身にとっても、デンマーク、ひいては北欧にとっても遺憾なことであったといわねばならない。ラスクの学問的意欲は、ア

アイスランド語文法を書いた後もますます高まった。そのためにはさらなる研究に没頭できる自由な時間と経済的な保障が不可欠であった。

ラスクは、1811年の『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』の出版や後述する1812年のスウェーデン・ノルウェー旅行と並行して、ある計画を実行しようとしていた。この間の事情を言語学者の目から見た論文がある。イエラムスレウの「ラスムス・ラスクとスウェーデン 1812-1818」(“Rasmus Rask og Sverige 1812-1818”)がそれである。イエラムスレウによると、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』が完成した後、ラスクはそれに付随するアイスランド語の辞書、読本、校訂本を刊行する計画であったが、それらを実行する前に、関心は別のものに移ってしまったのである。ラスクの心を引きつけたのは、1811年にデンマーク学士院が公募した懸賞論文であった。そのテーマは「古代スカンディナヴィア語の発生の確かな起源を、歴史的批判をもって探究し、適切な例によって証明すること、古代スカンディナヴィア語の特徴と古代・中世以来のノルド諸方言とゲルマン諸方言に対する関係とを示し、さらに、これらの言語におけるすべての発生と比較の原理を確立すること」であった。ラテン語学校以来多くの言語を習得し、その文法の構造と比較を常に考え、古スカンディナヴィア語すなわち古ノルド語が、アイスランド語の中に生き続け、そこにデンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語の北欧諸語の起源があると信じ、それらの言語とギリシャ語・ラテン語との系統的な近親関係に気づいていたラスクにとっては、飛びつきたくなるテーマであった。まさにラスクのために詠えられたようなテーマだったのである。

ラスクは、むしろ社会とは距離を置き、このテーマにひたすら取り組みればよかったのだが、1812年早々、また若い血が騒ぐ出来事が

続けて起こった。ひとつは、H.C. エーアステズ (H.C. Ørsted) (1777 - 1851) との言語論争、もうひとつは再びエーレンスレイヤーを批判したことである。エーアステズは、早くからその才能を発揮し、1802年に若くしてコペンハーゲン大学の特任教授となり、1817年に教授となった、電磁気学の基礎を築いた物理学者である。磁場の強さの単位エルステッド (oersted) という名称は、彼にちなんでつけられたほど、その功績は世界的に認められている。

エーアステズとのやりとりは、正確に言えば、論争とまではいかないかもしれないが、エーアステズからラスクへの手紙がきっかけであった。エーアステズは、自らの造語の元素名 ilt (ildt) 「酸素」と brint (brindt) 「水素」について意見を求める手紙をラスクに送ったのである。エーアステズの造語までは、デンマークでは、ギリシャ語起源の oxygen と hydrogen を直訳したドイツ語 Sauerstoff と Wasserstoff を、さらにデンマーク語に直訳した surstof と vandstof が用いられていた。物理学者でありながら、言語に関しても一家言をもち、言語純正論者だったエーアステズは、ドイツ語からの訳語を排したいと思った。エーアステズもまたロマン主義の流れの中にいた。現存のデンマーク語の語彙を利用して、酸素と水素を意味する単語を新しく造ったのである。エーアステズの意図は、論客として注目されてきたラスクに、自分が造った専門用語についての言語学的な意見を求めることにあったのであろうが、物理学者でありながら、新しいデンマーク語の単語を造ったのだという誇りと自信もあった。ラスクへの挑戦、挑発の気持ちがなかったとはいえないと思われるが、ラスクの返信のみが残っている現在、エーアステズの真の意図は推測するのみである。

元々、化学用語として定着しているとして oxygen は、フランスの科学者 A.-L. ラヴォアジエ (A.-L. Lavoisier) が、ギリシャ語 oxús 「酸っぱい」と -gène 「発生させるもの」を組み合わせ、 「酸を発生

させるもの」という意味で 1777 年に造った oxygène、hydrogen は、フランスの科学者 G. ド・モルボー (G. de Morveau) が、ギリシャ語の hudōr「水」と -gène を組み合わせて、「(酸素と化合して) 水を発生させるもの」という意味で 1787 年に造った hydrogène に由来する。英語ではフランス語を英語的な綴りと発音で借用したが、ドイツ語は、フランス語を母語で表わそうと、翻訳借用を試みたのである。もっとも、今のドイツ語では、Sauerstoff と Oxygen、Wasserstoff と Hydrogen が共存し、ドイツ語化運動の流れの中で、前者は日常語として多用され、後者は専門用語・科学用語として用いられている。エーアステズ以前のデンマーク語の酸素 surstof と水素 vandstof は、ドイツ語の影響が強かった時代に、それぞれドイツ語を直訳して「酸っぱい+物質」と「水+物質」という語構成で造られた。エーアステズの造った ilt あるいは ildt と brind あるいは brindt は、言語純正主義者としての本領を発揮して、デンマーク語固有の語彙を利用したものである。それぞれデンマーク語 ild「火」と古デンマーク語の brinne「燃える」から派生させ、語尾に t を付けたもので、酸素と水素のもつ性質をイメージした命名である。

さて、ラスクの返信の内容は厳しいもので、エーアステズにとっては藪をつついて蛇を出したようなものであった。以下は、1812 年の 1 月 28 日付のエーアステズ宛のラスクの返信の一節である：「ilt あるいは ildt に対しては、t を付けて名詞から名詞を造ったり、その新語が原理や元素の意味をもつようなそんな語尾や派生はデンマーク語にはないといえます。つまり、それはデンマーク語の中に存在する類推の規則に反しないにしても、少なくともその規則にしたがってはいないということです。すべての t で終わる単語は、形容詞か動詞から形成され、具体的な元素というよりむしろ抽象的な性質か動作を表わします。私が誤っていなければ、この単語は正しいデンマーク語としては通用しないでしょう。——しかし、作るより壊す方が簡単です。同

じ ild という単語を採用する以外に頭に浮かぶものはないことはお認めします。ただし、別の古い語形で、その単語に恣意的にその意味をもたせるのです」。ラスクは、このような説明で、エーアステズの命名は、デンマーク語の語形成の規則の上で正しくないことを指摘しながらも、否定するばかりではいけないので、建設的な意見として、確かに ild の関連語しか思いつかないことを認め、ild の古い形、すなわち、アイスランド語の eldr 「火」を基に eld としてはどうかと提案している。

水素 brind あるいは brindt についても、元々古デンマーク語の動詞 brinne からの派生語であることを念頭において、flyve 「逃げる」から派生した flugt 「逃亡」や ride 「乗る」から派生した ridt 「乗ること」のように、動詞から派生した短い名詞は動作や行為を意味しなければいけないので、具体的な元素名に用いることは不適切であると主張し、t の付かない語形の brind の方は、brand 「火」の別形と考えれば、まだ許容できると主張している。

これ以上詳細に述べることは控えるが、要するに、ラスクは、いわばエーアステズの自信作を、あたかも素人の無知な造語であるかのように、徹底的に批判したのである。すでに一流の物理学者であったエーアステズには自尊心を傷つけられた出来事であったに違いない。ラスクの批判に対するエーアステズの反応として、キアステン・ラスクは、『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』の中で、「彼（＝エーアステズ）は、ラスクに首根っこを押さえられそうだと感じたのか、「人工的に造った」専門用語に関することだから、大胆な造語も許されると思ったに過ぎないということによって、来るべき反論から身を隠してしまった」(p.74-75)と結んでいる。しかし、皮肉なことに、デンマーク語の単語として生き残り、現在も使われているのは、ラスクが「正しいデンマーク語としては通用しない」と批判したエーアステズの造語 ilt と brint である。ここでも、また、ラスクは正しいこ

とが必ずしもとおらないことを思い知らされ、エーアステズとの関係をとおして、ラスクの世間はさらに狭くなったことはいうまでもない。

この出来事と同じころ、ラスクが再び文学界の大物、エーレンスレイヤーを批判する事件があった。エーレンスレイヤーの講演を聴いたラスクが、その中で用いられたアイスランド文学の翻訳に噛みついたのである。日付は特定されていないが、1812年が明けてまもなくと思われるエーレンスレイヤー宛のラスクの手紙が、イェルムスレウ・ビエロム編の書簡集に収録されている。そこでは、とくにホーコン王の追悼詩『ホーコンの歌』(*Hákonarmál*)のデンマーク語訳について「これらの翻訳は原典からまったくかけ離れているように私には思われます。とくに、『ホーコンの歌』に関しては、大げさではなく、本来の精神と美しさの9割が失われていると思われる。アイスランド詩は、その韻律によって、私たちの目（もっと正しくは耳）に物語を伝えるのにすばらしく適しています…」という訳語のみならず韻律についての批判が展開され、間違った翻訳や不適切な翻訳がつぎつぎと列挙されている。ラスクの手紙に対してのエーレンスレイヤーの返信は確認されていないため、エーレンスレイヤーがどのように感じていたのかは判然としないが、再び騒動に巻き込まれるのを恐れたエーレンスレイヤーが、ラスクの主張を黙殺したというのが真相ではあるまいか。今となっては、これもまた推測するのみである。

また、直接的な摩擦にまでは発展しなかったが、1808年、ラスクが20歳のときの論争の相手モルベックに関する批判的な記述が、1812年3月19日付のビュロウ宛の手紙に見られる：「私はつい最近モルベックと一種の再開した知人関係（あるいは友人関係）にあります。これは彼の側からの誘いで、アイスランド語を教えて欲しいという手紙によるものでした。私は躊躇することなく北欧人の誠実さで手を差し伸べました。（中略）しかし、すぐにこれは私のためでもアイスランド語のためでもなく、いくつかの別の意図のためだということ

に気づきました。中でも透けて見えるのは、このことによって、彼が地方判事のバーゼンとの間で戦っている無価値でほとんど不名誉な論争に、私が参加することを妨げようとしているということです」。バーゼンとは、オーゼンセ時代のラスクが自由に蔵書を使わせてもらった『デンマーク王国の歴史』の著者のことで、モルベックは、過去数年、歴史問題をめぐってバーゼンと論争を繰り広げていたのである。ラスクとバーゼンとが親しいということを知ったモルベックが、ラスクの参戦を恐れたのだらうというのがラスクの推測である。ラスクが人を信じられなくなっていく兆候の表われと考えることもできるが、ラスク同様、論争によって世間の注目を集め、苦勞してコペンハーゲン大学教授の地位についたモルベックに、ラスクが考えたような魂胆がなかったとはいえないような気がする。モルベックは、ラスクと同じように、安定した生活を得るために、自分を売り出すために、なりふり構わない立場にあったのである。モルベックは、エーレンスレイヤーが用いた *urkraft* について、権威側に付いてラスクと論争したが、そのときモルベックの側に立ってラスク批判の詩を書いたグロントヴィとも、最初は親しかったが、後には絶縁状態になったことが知られている。猟官運動に成功して、後に（ラスクより早く！）教授のポストを手に入れるが、モルベックも人間的にはかなり屈折していたようである。

キアステン・ラスクの『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』によると、このころ「ラスクはすべての状況にいらつき、落胆していた。健康の問題で何かをするという意欲がうせていた。歯と副鼻腔と歯茎をくり返し襲う痛みがあり、1812年1月の厳しい気候は事態をさらに悪くした」のである。ラスクを焦らせ、失望させたできごとがつぎつぎと起こっていた。ラスクといっしょに図書館で働いていた同僚が、ラスクより勤務期間が短いにもかかわらず、司書になり、海外旅行の許可を得、さらには、ラスクより学問的業績が乏しいにも

かわらず、ノルウェーの大学の教授として迎えられた。自分も海外で研究し、早く大学で研究ポストを得たいと切実に思った。彼のまわりの研究者、エーアステズはベルリン大学、パリ大学などへ講義に出かける予定だったし、ライバルのモルベックはスウェーデンのルンド大学への研究旅行に行くことになっていたし、古くからの友人の数学者もスウェーデンから招かれていた。このとき、ラスク自身は、大学図書館で非正規職員として働く身分であっただけに、その焦りも大きかったのである。

ラスクは、上記の自分の周辺の研究者に起こっている事実を書いたすぐ後に続けて、このころのいたたまれない気持ちを、庇護者であるビュロウに、すでに引用した1812年3月19日付の手紙でつぎのように吐露している：「しかしながら、それは本当に私が求めているものではありません。私が欲しいのは名誉でも娯楽でもなく、ありとあらゆるまわりのしがらみと際限なく絡み合うことのない自由な活動なのです」。最後の「自由な活動」には、「自由な活動と私が呼んでいるのは、現在は貧せず、未来は基盤のしっかりした平穏さで、自分の魂を、自分自身のやりたいこと、自分自身の向かうべき道に委ねることができるような状態のことです。」という脚注が付いている。安定した生活基盤はなく、算数の家庭教師や図書館の手伝いで得るわずかな収入で生活を支えている現実には変わりはなかった。研究にかかる費用は、ビュロウのような篤志家や何らかの援助に頼らざるを得なかったのである。

このときラスクは、形式上はまだ24歳の大学生で、唐突に教授のポストを望んでいたわけではなかったであろうが、大学で安定した研究ポストを得ることを切望していた。当時のデンマークでは、大学は日本の戦前の帝国大学に近い存在で、現在の日本の大学制度と異なり、卒業資格がなくとも定職につくことができた。ラスクは、卒業試験を受けないまま、大学図書館で非正規職員として働いていたが、心の中

では大学での研究ポストを望んでいたのである。当時のデンマークでは、大学（といっても、大学はコペンハーゲンにしかなかったが）で学位を取得し、その能力が認められれば教授に推挙されることは可能であった。したがって、20歳代の教授の誕生はあり得ないことではなかった。例えば、ラスクの支援者のひとりミュラーは、20歳そこで学位を取り、20代半ばで神学教授になったし、物理学者エーアステズも20歳代で特任教授になった。そのような心境のときに、自分の方が劣ると思われない者の厚遇や昇進には焦りを感じたであろうし、外国への調査旅行については、2年前の公費でのスウェーデン行きが果たせなかっただけに、失望感と疎外感にうち苛まれていた。とくに熾烈な論争をした相手のモルベックが公費の研究旅行を認められたことについては、複雑な思いがあったはずである。「それは本当に私が求めているものではありません」という表現の中に、ラスクの心底の悔しさがにじみ出ているように思われる。悔しいとはいわず、本当に欲しいのは「自由な活動」といったところに彼の屈折した真情をうかがい知ることができる。

ただし、ラスクの名誉のために書いておくが、この手紙の前半は、ラスクがやりたいと思っている言語研究、とくにヨーロッパのすべての言語、あるいは。少なくともゲルマン諸語の新しい文法を書きたいという学問的計画が延々と述べられていて、置かれた状況に悲観した内容ばかりではないことである。ラスクが、ビュロウに訴えたかったのは、その計画の実行のために、保障された生活と平穏が必要だという事実、悲痛な叫びであった。しかし、計画を立て、準備もほとんど整っている学問的方向性、すなわち、すでに頭の中で熟成しつつあった壮大な文法の執筆の意欲とは裏腹に、現実の生活は平穏とはいえないものであった。

周囲の研究者から取り残されていくような焦燥感とともに、ラスク

の心を苦しめたのは、家族問題であった。ラスクの父ネルス・ラスクが1810年に他界すると、義母アンネ・カトリーヌは翌年再婚した。ネルス・ラスクが生涯に3回の結婚をし、アンネ・カトリーヌは3度目の妻であったことはすでに述べた。また、ラスクが義母、アンネ・カトリーヌのことを「私の知るかぎり最も尊敬に値し、最もすばらしい女性」と評したことに触れたが、彼女もまた生涯に3回の結婚をすることになる。ところが、ラスクの父の死の翌年に結婚した相手との生活はうまくいかなかったのである。結局、この結婚は、数年後には破綻することになるのだが、このことは義母思いのラスクにとってはつらいことであった。

また、ラスクがかわいがった異母弟のハンス・クリスチャンのことも頭が痛かった。ハンス・クリスチャンは父と同じ仕立て屋になるための修行をしていた。しかし、母の心配をよそに、彼は職人になるより勉強する方を好んだ。彼は将来聖職に就きたいと思っていたのである。そのための学校に通いはじめたが、学費が続かず、退学せざるを得なかった。ハンス・クリスチャンは、後には、ラスクの援助のおかげで、無事に初志を貫徹して聖職者になるのだが、当時は、ラスクは自分ひとりの生活にも困窮していた時期であり、義弟のめんどうを見てやる余裕はさらさらなかった。自分ひとりでも生きていくのが精一杯なのだから、家族の世話はできない、家族とは縁を切ってしまいたいと思う一方で、家族思いのラスクは、何とか家族のめんどうをみてやれないものかと悩んだ。それは、ちょうどキリスト教と縁を切ろうとするのだが、なかなかそうもいかず、ハンス・クリスチャンを聖職者にする自家撞着とよく似ている。

このような焦燥感と心配事がラスクを苦しめていた、ちょうどそのとき、再びスウェーデン行きの話が、急遽持ち上がった。この企画はスウェーデンのストックホルム、ウプサラ、ノルウェーのクリスチャ

ニア（実際にはストックホルムの滞在がほとんどであった）への古文書調査の旅行であった。これはラスクにとっては願ってもない好機であった。不運にもあきらめざるを得なかった前回のスウェーデン旅行と同様に、コペンハーゲン大学図書館司書ニュロップにつきしたがうものであったが、ラスクの経済状態は相変わらず悪いままで、今回もまたビュロウの援助にすがる必要があった。渡航費や滞在費は国費から出るにしても、出発に際しては、国費での出張であるからには、身なりを整えなければならなかったし、そのほか、諸々の準備に費用がかかった。コペンハーゲンでは入手できない書物の購入資金も必要であった。しかし、ビュロウからの援助の申し出を待つ時間的ゆとりはなく、必要な準備費用として、一時的にバーゼンを始めとする友人・知人から借金をせざるを得なかった。後に言語学界が注目することになる画期的なアイスランド語の文法を出版したからといっても、一介の貧乏学生の身分に変わりにはなかった。出版に際して何部印刷されたのかは分らないが、デンマーク語で書かれた文法書の読者層は限られていたし、人口の少ないデンマークで学術書1冊が出たからといって、経済的に豊かになるはずもなかったのである。

そのようなとき、ビュロウからの援助が届くことになる。スウェーデンへの上陸直前の1812年4月6日付のラスクがビュロウに宛てた手紙には、「閣下のご厚意に大変感謝いたします。閣下のご親切がなければ、この出張も私には不可能になっていたでしょう。」という率直な感謝の気持ちが述べられている。ビュロウがラスクに援助した金額は300 リースダーラ (rigsdaler) であった。リースダーラとは、1873年にクローネに切り替わるまで、デンマークの主要通貨であった。300 リースダーラは、『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』の著書キャステン・ラスクによれば、現在のデンマークの通貨クローネに換算すると約12,000 クローネに相当する。それを1クローネ22円で日本円に換算すると264,000円となるが、当時の学術出張にとっ

て潤沢な資金となったのかは判然としない。しかし、この援助によって、少なくともラスクのスウェーデン・ノルウェー旅行が可能になったことは確かである。ラスクの手紙には、年俸や援助等の金銭に関する具体的な数字がしばしば登場し、年俸や援助額にこだわる場面に出会う。これは、ラスクがいかに経済的に困っていたか、どれほど安定した生活を望んでいたかの証左となっている。

なお、ラスクは、旅行から戻るとすぐに庇護者であるビュロウに報告の手紙を書いた。1812年6月24日（コペンハーゲンに戻った翌々日）付の手紙には、この援助金の使い道が「閣下のご厚意でいただいた300リースダーラのうちの半分で、すぐに旅行に必要なものを買い、残りの半分では、ストックホルムで、かなりの量の書籍を購入いたしました。」と報告され、その後には、スウェーデン語・ドイツ語辞典、ラップランド語、フィンランド語、スウェーデン語関係の資料を購入したことが記されている。友人・知人に借りた分も含めて、ラスクは人の好意と援助のおかげでスウェーデン・ノルウェー旅行を成功させることができたのである。

こうして、ラスクとニュロップは、1812年4月7日、コペンハーゲンを発ってフューン島北端のヘルシンゲーアまで馬車で行き、ヘルシンゲーアからは対岸のスウェーデンのヘルシンボリ (Hälsingborg) に船で渡った。ヘルシンボリからは、再び陸路でストックホルムに向かったが、北欧の4月はまだ寒さが厳しく、かなりつらい旅であった。4月15日にストックホルムに着いたときには、ラスクは疲れを出し、しばらくは外出ができないほどであった。鉄道のない当時の北欧内部の旅行は、決して楽ではなかったこともあるが、ラスクが決して肉体的に頑健ではなかったことが分かる。

スウェーデンではラスクは歓待された。写本収集家マグヌースソンの努力のおかげで、まとまった資料としてはスウェーデンよりデンマークの方が充実していたが、スウェーデンではデンマークに先駆け

て、アイスランド語・アイスランド文学の研究がすでに根を下ろしていた。スウェーデンの研究者たちはラスクの学識に敬意を払い、ラスクも多くの友人・知人を得た。ラスクは、スウェーデン語の習得やウプサラ大学に保存されている『スノリのエッダ』の写本の研究をすると同時に、当初からの目的のひとつであった、フィンランド語やスウェーデン北部のラップランド語の習得にも、時間を割くことができた。ここでもラスク特有の行く先々のネイティヴ・スピーカーからじかに言語を習得するという方法を採用した。相手にアイスランド語を教え、代わりにフィンランド語を習うというやり方であった。コペンハーゲンでは入手できないラップランド語の資料も手に入れた。ラスクは、聖職者・詩人・文献学者の A.A. アフセーリウス (A.A. Afzelius) (1785-1871) とはとくに親交を深め、二人の間には、何通もの手紙のやり取りが確認されている。アフセーリウスがアイスランド文学、とくに古エッダのスウェーデン語訳を出版するときには、ラスクがその協力者になったほどであった。また、数年後、ラスクがカフカスへの旅行を思い立ったのも、アフセーリウスの誘いがきっかけであったが、これについては後で詳しく述べる。

6 月には十分な学問的な成果とともにスウェーデンを離れて、クリスチャニアに行き 5 日間滞在した。ラスクはここでも温かく迎えられるのだが、旅の途中で起こったひとつの出来事を注記しておきたい。スウェーデンからノルウェーへの馬車には御者はおらず、代わる代わる手綱を取っていた。6 月とはいえ、まだ雪で滑りやすい道であった。たまたまラスクが手綱を握っていたとき、車輪が石に乗り上げ馬車が傾き、ラスクは道に投げ出された。馬車の下敷きになったが奇跡的にけがはなく、ラスクは馬車に戻り、旅は続けられた。これは、ラスクがこの種の事故にあった最初であったが、以後も同じような事故が自分に降りかかるとは、ラスク自身、このときは想像もしていなかったにちがいない。人の人生には不慮の事故は、本人の注意深さとは無関

係に、避けられないことがあるが、不思議なことに、同じような事故や災害が同じ人に何度も降りかかることがある。いわゆる不運な人である。ラスクは、自分がそのような不運な星の下に生まれたとは知る由もなかったのである。この不運とスウェーデンに着いたとたんに体調を崩し、デンマークに戻ってもすぐに再び健康を害するという肉体的な脆弱さとが、ラスクに与えた精神的ストレスは決して小さなものではなかった。

しかし、そのような事故や病気はあったものの、自分の研究が正当に評価されず、発言が誤解され、まわりとの摩擦の多かったコペンハーゲンでの生活に比べれば、二ヵ月半のスウェーデン・ノルウェー旅行は、ラスクには快適な、満足のいくものであった。しかし、そのような牧歌的な生活も長くは続かず、6月22日、再びラスクはコペンハーゲンの暗い現実に戻るようになった。そのときの気持ちを、ラスクは、上掲の6月24日のビュロウ宛の手紙でつぎのように表現している：「レゲンセンの小さく暗い穴倉に帰ると、以前の思いが戻ってまいりました。しかもその上、頬の調子が悪くなり、この何日かは半病人になっております。(中略)私は祖国ではうまくやっていけないのではないかと、少なくとも気持ちが安らぎ、満足できる地位についたときには、あらゆる苦い憂鬱が心に根付いてしまっているのではないかと思います。その前に、うまくどこかずっと遠くの国に飛んで行ければと思っております」。充実したスウェーデン・ノルウェー旅行と温かい交友関係の後の、学生寮レゲンセンの一室は、ラスクがいみじくも「穴倉」と表現しているように、寒々として暗かった。

実は、上記の引用のすぐ前には、旅行から戻ると大学図書館から通知をもらって、「非正規職員としての4年間のご奉公の後」、年俸100リースダーラの司書補(amanuensis)として、採用されることになったことを報告している。ささやかな収入でも、定職につけたということは、うれしかった違いないが、その報告のすぐ後で、ある若い学生

が1日2時間勤務の写本の写字生として、王立図書館に年俸400リーズダーラで雇われた話を持ち出し、自分の恵まれない立場に不満をぶちまけている。しかも、頬の痛みと旅の疲れが重なって、帰国直後のラスクは、心身ともに病んでいたのである。祖国を愛し、祖国のために尽くそうという意欲があるにもかかわらず、人間関係の軋轢から正しい評価を得られず、経済的にも不遇で不安定な身分に甘んじなければならない身を嘆いているのである。とくにストックホルムの温かい評価と歓待をコペンハーゲンの冷たい現実と比べると、「どこか遠くの国」に自分を生かす道を求めようとした心理はたやすく理解できる。そして、ラスクの頭の中にあった「どこか遠くの国」とは、当然スウェーデンであったことは疑う余地はないが、当時のデンマークのスウェーデンに対する国民感情に取り巻かれた環境では、ビュロウの手紙に具体的な国名を書けなかったことも容易に理解できるのである。

ラスクがニュロップとともにスウェーデン・ノルウェー出張に出かけた1812年とはどういう年だったのかを、もう一度振り返ってみたい。このときは末期とはいえ、まだナポレオン戦争が続いていた。ナポレオンがロシア遠征に踏み切ったのが1812年6月23日である。フランス軍は、ロシアの焦土作戦に敗れ、同年12月フランスに戻ったが、40万人近い死者を出し、20万人が捕虜となったことはよく知られている。ナポレオン戦争が、最終的に第二次パリ条約で終結したのが、1815年のことであった。

デンマークとスウェーデンに関しては、1813年のキール条約でデンマークがスウェーデンにノルウェーを割譲することで終結を見たことはすでに述べた。すなわち、1812年当時は、終始一貫して、フランス軍に組していたデンマークと対仏同盟に加盟していたスウェーデンとは、まだ戦争状態にあったのである。国と国とは戦争をしていて

も、北欧という共通の歴史をもつ民族の間に、伝統文化の研究に関する交流があったのは不思議ではないが、当然、一般のスウェーデン人のデンマーク人に対する感情には厳しいものがあったことはいうまでもない。旅行中にはパスポートの件で、厳しい検閲を受けたこともあった。そのような社会情勢の中で、ラスクがスウェーデンで、そのアイスランド語の卓越した学識故に、尊敬の念をもって温かく受け容れられたことは例外的なことであったのである。それだけに、一般のデンマーク人がスウェーデンに対して長年の怨念に似た感情をもっていたのとは異なり、元々スウェーデンを敵視していなかったラスクが、スウェーデン人の歓待、いわば、敵国での歓迎、に感動し、スウェーデンに対する感謝の気持ちをもったことは自然な成り行きであった。

さて、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』は、アイスランドで大きな反響を呼んだ。それはラスクが予想もしないことであった。ラスクを讃える詩が読まれ、それが船便で、ラスクの元へ届けられたほどであった。当時のアイスランドは単なる漁業国で、デンマークの支配下にあった。G. カールソン (G.Karlsson) の『アイスランド小史』によれば、1801 年当時の首都レイキャヴィークの人口はわずか 307 人だったという。アイスランドの面積は、10.3 万平方キロメートルで、日本の面積の 4 分の 1 ほどである。レイキャヴィークの人口は、2006 年のアイスランド統計局に調査では、約 11 万人、周辺の 6 都市を含めても、約 19 万人にしかない小さな首都であるが、当時は、人口から見ても、まだ都市というより小さな集落の域を出てはいなかった。しかし、アイスランドは、エッダやサガという中世を代表する豊富な文学を残しているという点で、文学的のみならず、言語学的にもきわめて重要な文化遺産の宝庫である。アイスランドは、ナポレオン戦争では、デンマークとの間の船便を絶たれ、イギリスに貿易特権を認めるよう迫られたこともあった。デンマークが大国の間で揺れたよ

うに、その属国のアイスランドもまた宗主国デンマークとイギリスの間で揺れ動いたのである。

一般に、1つの地域に2つの言語が存在する場合、軍事的・経済的・文化的に支配的な方の言語が優勢になることは、よく知られている。アイスランドの事情も一般の法則にしたがっていた。社会の階層の上の者や知識階級はデンマーク語を学んだ。もちろん当時のアイスランドに大学は存在せず（アイスランド大学（Háskóli Íslands）が設立されたのは1911年であった）、大学教育を受けたい者はコペンハーゲン大学で学ぶしかなかった。ラスクが、コペンハーゲンで知り合い、終生の友となったアイスランド人のソルステインスソンやヘルガソンが、コペンハーゲン大学で学んでいたことは、すでに述べたとおりである。

そのような状況の中で、支配的立場にあるデンマーク人がアイスランド語を学ぶことすらめづらしいのに、アイスランド語がデンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語の源の言語で、北欧の繁栄を支えた言語であると表現されたのである。アイスランド語が用いられた文学こそが、エッダとサガであり、エッダには800年から1100年ごろの書かれた『古エッダ』と1220年ごろに書かれた『スノリのエッダ』とがある。これらについてはすでに何度か触れているが、簡潔に説明すれば、『古エッダ』では北欧の神話や英雄伝説が詩の形式で語られ、スノリ・ストルルソン作『スノリのエッダ』は散文で、『新エッダ』とも呼ばれ、『古エッダ』を引用しながら、北欧神話の概説、詩作法、韻律について語られている。サガは12、3世紀ごろから書かれた散文・物語で、上記のスノリ・ストルルソンによる『ヘイムスクリングラ』のようなノルウェー王朝史、『エギルのサガ』のような主人公エギルのヴァイキングとしての冒険譚や、『ニャウルのサガ』のようなニャウルの一族の波乱に満ちた歴史を扱ったもの、ノルウェーからアイスランドへの殖民の苦勞の記録を扱ったもの等、まさにヴァイキング時

代の繁栄の記録と歴史の文学表現である。

アイスランド文学は、国土は狭く、人口は少なくとも、アイスランド人の誇りであり、精神的支えであった。娯楽の少ない北の果ての孤島で、住民は長い間エッダとサガという伝統文学を、誇りと愛着をもって愛読してきたものである。しかし、それはあくまでもアイスランド人の内なる遺産であった。ところが、ラスクの『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』によって、アイスランド語の地位が一挙に高められ、アイスランド文学も、突然日の目を見たのである。アイスランド人は、最初は予期しない状況の勃発に当惑し、すぐ後で歓喜した。注目されることのなかった自分たちの言語と文学が、突然ひのき舞台に押し上げられたのである。元々国民の中に潜在していた自国文化に対する誇りが高揚し、ラスク賛美の詩が生まれても不思議ではなかった。アイスランドでもそろそろナショナリズムが台頭し始めたころであった。ラスクのアイスランド文法は、アイスランドのナショナリズムに火をつけたのであった。ラスクのアイスランド語文法は、言語学の発展のみでなく、アイスランドの近代化の促進に大きく貢献したことになる。

自分が書いたアイスランド語文法が、思いもかけず、アイスランドで高い評価を得たことで、ラスクにはアイスランドが急に身近な土地となった。ペーターセンはつぎのように述懐している：「アイスランド語を完璧に習得するために、アイスランドに行くことは、長い間のラスクの密かな願いであった。彼は、1811年の夏、翌年のアイスランド旅行をすでに考えていたが、その計画を実行する資金がなかった」（『ラスムス・クリスチャン・ラスクの生涯についての寄稿』、p.242）。デンマーク学士院の懸賞論文に応募する意気込みは高まり、論文執筆もまたラスクにとって身近な可能性になったのである。論文のテーマを満たすために、ノルド語の起源を求めるために、アイスランド語の

研究を深めることは、不可欠であった。ノルド語の周辺の言語として、フィンランド語とラップランド語は、スウェーデンへの調査旅行で習得する機会を得たが、アイスランド語はすでにネイティブ・スピーカーと同じように話せるとはいえ、論文の核になる言語を現地で深化させ、その背景の文化を知ることは何より重要であった。ラスクにとっては、今やアイスランドはどうしても訪ねたい土地になった。そんな折、ラスクのうわさを聞いたアイスランドの商人のひとりが、彼をアイスランドへ招待してくれるという話が持ち上がった。ラスクは、後先を考えず、その話に飛びつくことになる。ペーターセン宛のラスクの手紙によれば、「アイスランド生まれのアイスランド人の商人が、外国人が自分の母語を話し、祖国の古い文学を研究することを知って興味をそそられた。彼は私に無料の旅行を申し出てくれた」（「ラスムス・クリスチャン・ラスクの生涯について寄稿」、p.243）のである。

ラスクは、まずアイスランド語を現地調査し、さらにアイスランドの歴史を学び、アイスランドの社会的状況の全体像を把握したいと思った。今日から見ると実に不思議なことだが、ラスクはアイスランドを訪ねた世界で初めての言語学者であった。当時の言語学の水準では言語の系譜的な近親関係はまだ解明されていなかったし、ゲルマン語という明確な概念もなく、ゲルマン語の中で最も古い資料を有するノルド語への関心も高くなかった。ノルド語の最も古い資料としては、紀元2世紀に遡るルーン文字が刻まれた石碑が残っている。内容的の点では、「誰々の息子の誰々がこの…を建てた[作った]」というような単純なものだが、資料の古さと文字の特異性の点では、言語学上、重要なものである（例えば、エーレンスレイヤーも詩の題材にした黄金の角杯（Guldhornene）のひとつには、「私、ホルタガスティズの息子、フレワガスティズがこの角杯を作った」と刻まれている）。その上、ノルド語の中でも古ノルド語、すなわち事実上、古アイスランド語が、最も古い文法構造をもち、現代アイスランド語がその古い文法を忠実

に保存しているということすら知られていなかったのである。そのような未発達な言語研究の状況下で、ラスクがアイスランド語に強い興味を引かれたのは、きわめて特殊な出来事だったのである。

ラスクがアイスランドに到着したのは1813年の秋のことだが、本当は夏に出かける予定であった。出発が遅れた理由は、前述のナポレオン戦争に絡む政情不安定と、国家財政の破綻のためであった。しかし、『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』によれば、その遅れはラスクにはプラスに作用した。アイスランド行きの援助を獲得する時間的なゆとりを生んだからである。いつもの庇護者・支援者のビュロウからだけでなく、国王フレゼリク6世やノルウェーの資産家からも援助を受けることができた。しかも、出発までの間に、懸賞論文の執筆の時間がとれたことは何よりも大きかった。さらに、ラスクは、出発前に、祖国の歴史と言語のための王立デンマーク協会とスカンディナヴィア文学協会の会員になり、研究者としても公に認められるようになった。

ラスクのこのアイスランド旅行については、イエスベルセンはラスク伝の中で、ラスクがアイスランド全土を回り、大勢のアイスランド人の歓迎を受け、アイスランドに没頭できたことが、後の研究に役立ったことを認めながら、「彼の（1815年秋までの）2年間のアイスランド滞在に関しては、詳細に語る理由はない」（p.20）と突き放したような書き方をしている。しかし、ここでは、ラスクとアイスランドとの関係を理解するために、少しだけその足跡をたどってみることにする。

アイスランドに着いたラスクは、最初のうちはレイキャヴィークに滞在した。レイキャヴィークは首都として大きくなりつつあったが、人口はまだ500人にも満たない小さな町で、公的な建物も、教会と裁判所と監獄だけであった。しかも、この年には、食べさせていけないという理由で囚人は解き放たれていた最悪の環境にあった。そのよう

な状況下で、ラスクはアイスランド人の店屋に間借りすることになる。間借りといっても一部屋しかない家で、その家族の喧騒の中で、ラスクはアイスランド語を研究し、懸賞論文を書き続けた。

レイキャヴィークでは、デンマークの属国であるアイスランドの事情を反映し、デンマーク語が支配的であった。多くのデンマーク商人も滞在していた。社会的な環境が最悪であるのみならず、文化的・経済的な支配者階級の言語としてのデンマーク語がアイスランド語の環境を危機的にしていた。レイキャヴィークは、期待したアイスランド語の習得と研究には不向きであることにラスクは失望した。アイスランド語を理想の言語として、北欧神話の主神オージン（Óðinn）を崇拜するかのように、高く評価していたラスクには、大変なショックであった。彼は、このままではアイスランド語は滅びてしまう、100年もしないうちにレイキャヴィークの住民はアイスランド語を忘れてしまい、200年もしないうちにアイスランド全土からアイスランド語はなくなってしまう、という危機感をもった。ラスクは、その状況を見て、アイスランド語の保存のためにできるかぎりのことをしなければならぬと心に決めたのである。

ラスクは、純粋なアイスランド語を求めて、レイキャヴィークの外に出ることにした。しかし、問題があった。経済的に破綻したデンマーク政府は、経済の建て直しを目指して、ちょうど1813年に新しい貨幣に切り替えたところであった。ところが、この新貨幣制度がアイスランドに適用されたのは2年後のことで、ラスクはもってきた貨幣が使えず、当時のアイスランド、とくに地方では、まだ一般に行われていた物々交換で当座をしのがなければならなかった。ラスクのアイスランド滞在は2年間であったことは、すでに述べたが、この間ラスクは貨幣制度の切り替えの狭間で思いもしなかった苦勞をすることになったのである。ラスクは波乱と激動の時代の落とし子でもあった。

レイキャヴィークは、現代のアイスランド語を学ぶには不適と考

ク学士院に提出されている。恵まれない環境で、ときどき遠出もしながら、いくつもの研究を並行して行うラスクのバイタリティーの成果であった。ラスクは、レイキャヴィークを含めて、南部のアイスランド語は混交が進み、すでに言語的純粋さを失っていることを確認し、純粋さを求めてアイスランド北部への旅に出ることになる。ペーターセンが引用しているラスクの1813年9月7日付の手紙では「アイスランド語は今も話されてはいますが、レイキャヴィークでは少し混ざり合っていて、田舎の方がより純粋です。でも、全体的に見て、南部地方では、あまり純粋でも純正でもありません。」と述べ、レイキャヴィーク周辺の南部地方以外の、人口はまばらで経済的にも遅れているが、言語的汚染の少ない地方のアイスランド語を調査する必要に触れている。

ラスクが、そのような北部のアイスランド方言の現地調査と埋もれている文献の発掘のために、北部地方への旅に出発したのは、1814年の7月の半ばであった。交通の手段は馬車で、6頭の馬が必要だったと、ラスクはミュラーへの手紙で述べている。現在のアイスランドにも鉄道はなく、通常の移動はバスや車に頼らなければならないが、当時の交通手段は徒歩と馬しかなかったのである。馬の背に揺られながら、ほとんど人の住んでいない内陸の雪道を北上する旅は、決して楽なものではなかった。それでも人の親切に接することはできた。名前は明らかにされていないが「ある有力者」は、4、5人の甥たちに、英語、ドイツ語、地理を教えさせてくれ、お金とともに旅に不可欠な馬を2頭、都合してくれたと報告している。

レイキャヴィークへ帰途は、費用はかさみ、危険との隣り合わせであったが、ラスクは東部地方を迂回しながら戻ることにした。アイスランドを1周して、全域の方言を調査しようとしたのである。いつも行く先々の方言をその土地の人から学びながら旅をすることはラスクの習性になっていた。道案内が欠かせないほどの危険なコースであっ

たが、ラスクはだれの手助けもなしにひとりでそれを成し遂げた。脆弱な体をもっているにもかかわらず、このような思い切った行動に出るのもラスクの特徴のひとつである。ラスクが、危険で困難な旅を終え、レイキャヴィークに戻ったのはその年の秋であった。このころになると、友人たちからコペンハーゲンに戻ってくるようにという手紙がきていたが、1814年の夏に、ビュロウから200リースダーラが送られてきたので、ラスクはもう1年アイスランドにしようと決めた。

1814年-15年の冬は、すでにレイキャヴィークの大聖堂の牧師になっていたヘルガソンの家で過ごした。多くのラスクの伝記に登場する、ラスクがヘルガソンを訪ねたときの有名なエピソードがある。ラスクは、戸口で、北部地方からやってきた田舎の若者のふりをして、ヘルガソン宛の手紙を預かってきましたといった。ところが、ヘルガソンはラスクが正体を明らかにするまでは、アイスランド人の使いだと信じていたというのである。北部地方の短い滞在の間に、ラスクはヘルガソンでもアイスランド人と識別できないほどの方言を身につけていたのである。これは、ラスクの言語習得の速さと天才の証のひとつとして、語り継がれている話である。

アイスランドでは、ラスクはいろいろな人の親切や援助のおかげで研究生生活を送ることができた。レイキャヴィークや南部地方では、アウルトニ・ヘルガソンの温かいもてなしが何よりもありがたかった。彼は、ラスクに対する援助の一環として、同居している若い学生たちに、英語、地理、ギリシャ語も教えさせてくれた。ラスクは「ある手紙の中で、「二度と別れずにいられ、もし選べるものなら、ここではなくコペンハーゲンで彼とともに住めればいいと思います。」とっている」(レニング『ラスムス・クリスチャン・ラスク』、p.40)と、ヘルガソンへの思いを紹介している。ヘルガソンのもとでは、外国語を教えるばかりでなく、教会で説教もしたことも付記しておきたい。ラスクは、オーゼンセ大聖堂学校以来、神の摂理に対する疑問をもち、

無神論を臭わせていたが、教会で信仰についての説教ができるだけの十分な教理の知識と寛容さももち合わせていたのである。また、上記のミュラーの手紙では、ヨウンスンについても、経済的にも研究の面でもお世話になり、貴重な文献を惜しみなく貸してくれたと感謝の意を表わしている。北部地方への旅では、法外な船賃を要求する渡し舟の船頭に腹を立てたり、多くの貴重なサガをもっているにもかかわらず見せてはくれなかった狭量な男に出会ったりもしたが、旅そのものは、全体的に満足できる実りの多いものだった。

そのようなアイスランドでの充実した日々のうちにも、ラスクは1815年になるとデンマークへの帰国を考えるようになる。いつまでも人の好意と経済的援助に甘えているわけにはいかなかった。何よりも、すでに懸賞論文は提出したので、コペンハーゲンに戻って学問的な評価を受け、しかるべき研究ポストにつきたい気持ちが募ってきた。学問的な野心と世俗的な欲望が膨らんできたのである。ラスクはこの年の秋、レイキャヴィークを発ち、デンマークに向かった。帰途、3週間ほどスコットランドのリースに滞在したが、スコットランド方言を調査するうち、レニングの表現を借りれば、ラスクは「すぐに多くの点で英語よりデンマーク語に近い南部スコットランド方言の特徴に感銘した」（『ラスムス・クリスチャン・ラスク』、p.43）。8世紀の終わりのころから始まったヴァイキングのブリテン島の略奪以来、ヴァイキングたちがブリテン島北部に居住することを認めた、9世紀のアルフレッド王のときのデーン・ロー（Danelaw）の時代を経て、ヴァイキングの族長で、後のデンマーク・ノルウェー王カヌート（デンマークでは、クヌーズ大王 Knud den store と呼ばれる）が英国王になった11世紀のデーン王朝まで、古デンマーク語が北部の英語に与え続けた影響に驚いたのである。ラスクは、リースでも、多くの知己を得、デンマークでは入手できない古英語の資料も蒐集した。わずか3週間の滞在であったが、スコットランドでのラスクの学識に対する評価は

高く、後にエディンバラ大学から研究ポストの提供を申し出られたほどであった。

ラスクは、コペンハーゲンに戻ったものの、アイスランドに大きな置土産を残した。1814年ごろから、ラスクはヘルガソンにもちかけて、アイスランド文学協会（Det Islandske litterære Selskab）の設立を計画していた。ラスクのアイスランド語とアイスランド文学に対する強い思いが、このような運動に駆り立てた。ラスクの特徴のひとつは新しいものを創造する意欲である。アイスランド文学協会は、ラスクのアイスランド滞在中には実現しなかったが、1816年3月30日、コペンハーゲンの円塔にあった大学図書館で発足し、この組織は現在でも存続している。ラスクは、初代会長に選ばれたものの、会長はアイスランド人でなければならないという規定に基づいて、ヘルガソンを会長とし、自らは名誉会長となった。ラスクは、1816年の10月に東方への研究旅行に出発することになるが、そのときまでこの地位にあった。

宛先は不明だが、アイスランドの帰りにスコットランドのエディンバラに立ち寄ったときにラスクが書いた、1815年9月21日付の英語の手紙が残っている。その手紙は以下のように始まる：「すべてのゴート民族（＝ゲルマン民族）は、かなり長い間、お互いに競い合うかのように、人々の精神を奮い立たせておくのに有益で、学者には興味深い、国家の栄光と密接に関連付けたものとして、古代の歴史の重要な部門として、先祖の氏族全体の遺物を保存することに特段の注意を払ってきましたが、どうしてすべての聖なる遺物の中で最も気高いものを見過ごし、不注意にも時の破壊するまに任せ得たのか不思議でなりません。アイスランドで唯一保存されている、ゴート民族の遺物のうちで最も貴重な名残りは、もちろん北欧全王国の古代の共通の言語です。この言語は、本当に驚くべき程度の純粹さと優雅さで、ア

アイスランド全域でいまなお話されています。(中略) 私は、2年間、アイスランド島を回り、このすばらしい言語の現状を調査しましたが、この土地のどこに行っても古スカンディナヴィア語で現地の人々と話をすることができましたし、彼らが英雄時代の古いサガを今も読んでいるのを知りました。それどころか、異教徒の神々の功績を讃えるエッダの歌は、いくつかの難しい単語を除けば、今もなおどんな農民の少年にも理解されるものがあるのです。印刷機械はほとんど使用できない状態で、その文学も言語もまさに崩壊状態にあります。後期の機知と学識の最も貴重な作品は写本でのみ残り、永久に失われる危機にあるのです。(中略) そういうわけで、アイスランドの言語、文学、知識を保存したいと思い、私は、年報をもつ協会を設立し、後期に書かれたような傑作を出版し、あらゆる生き方における学識と有益な情報を、保存し増大させるのに必要な新しい本を獲得しようではないかと、この国のすべての学問を愛する人たちに呼びかけました。すると、少ない人口の割には、かなりの数の人が賛同してくれました。しかし、アイスランド語あるいは古スカンディナヴィア語は、英語やスコットランド方言の一部の源で、その上、両方の主な源であるアングロ・サクソン語は、アイスランド語と非常に近い関係にあるのですが、ひとえに往時のスカンディナヴィア人のブリテン島への絶え間ない侵略のために、それ自体が難しく、混交していますので、私のアングロ・サクソン語文法の編集の経験を信じれば、アングロ・サクソン語は、アイスランド語の絶え間ない助けをとおして以外、決して完全には開放されないでしょう」。

以上のように、ゲルマン語におけるアイスランド語の、その保守性故の学問的な希少価値と重要性を説き、アイスランド語の危機的状況とその保存の必要性を訴えている。また、イギリス人に具体的にアイスランド語の価値を認識させるために、アイスランド語と古英語との関連性と古英語の真の研究のためにもアイスランドが不可欠なことを

説いた後で、ラスクはアイスランド文学協会の設立のための寄付を熱心に呼びかけている。ラスクのこの手紙は、名前は特定されていないが、学問に理解のあるイギリス人の有力者に訴えかけたものと想像できる。主旨は、ラスクの中では、アイスランド語・アイスランド文学の研究の遅れた、まだその学問的価値が十分に認識されていなかった、当時のデンマーク学界に訴える気持ちと重なり合っていた。つまり、この手紙は、アイスランド語の価値が認識されないデンマークの現状を憂える気持ちの表われでもあった。アイスランド文学協会の設立は、このようなラスクのアイスランド語に対する思い入れの成果であった。また、この手紙から知り得るもうひとつの重要な情報は、ラスクは、アイスランド滞在中に、懸賞論文とともに、アングロ・サクソン語文法、すなわち古英語の文法を、すでに書き上げていたという事実である。

ラスクが北欧語の起源、系統、比較について考察した懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランドの起源の研究』を、アイスランド滞在中の1814年にデンマークに送ったことはすでに述べた。提出が翌年になったのはその論文を人に託したからであった。この論文は最優秀賞を受賞したが、出版されたのは1818年であったこともすでに述べた。ラスクは、当然速やかな公刊を望んでいたが、フレゼリク6世の出版援助が決まったのが1817年、実際の出版は1818年までずれ込んでしまったのである。いざ出版というときには、ラスクはすでにインドへの大旅行の途上にあり、すでにデンマークにはいなかった。提出の遅れと出版の遅れとが重なって、公になったときには、ラスクは母国デンマークで直接の賞賛を享受することはできなかったのである。もし、最優秀賞を受賞した1815年に、すぐに出版されて、多くの言語学者の目に触れていたら、デンマーク国内でのラスクの評価は高まり、ラスクが願っていた安定した研究ポストの提供が現実のものに

なったかもしれない。当時、ラスクが何より願っていたのは、経済的に不安のない、自由な研究生活だったのだから、安定したポストが得られれば、ラスクの研究の成果はさらに豊富で充実したものになっていたかもしれない。また、1816年に故国を離れて苦難の旅に出ることもなかったであろう。そうなれば、ラスクの人生はまったく変わったものになっていたかもしれないのである。これを運命のいたずらとも呼ぶのであろうか？

ここで、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』について考えてみる。この論文はイェルムスレウ編『ラスムス・ラスク精選論文集』の第1巻に収録され、第3巻には160ページものコメントが付いている。この企画は1932年のラスクの100年忌に合わせ、ラスク・エーアステズ基金(Rask-Ørsted Fondet)の援助によってなされたものである(ラスク・エーアステズ基金は、デンマークを代表するふたりの学者、ラスクとエーアステズの名前を冠した国際学術基金で、1919年に設立され、1972年まで存続した。運営は、教育省、国会、学術協会、大学協会、カールスベア財団等の代表委員によって行われた。イェルムスレウ・ビエロム編『ラスムス・ラスク書簡集』もこの基金によって刊行された)。タイトルページによれば、この精選論文集は、トムセンの要請により、イェルムスレウが編集し、序文をペーザーセンが書いている。コペンハーゲン大学の印欧比較言語学の3代にわたる教授であり、世界的に名の知られている言語学者が名を連ねているのである。このタイトルページの3人の著名な言語学者の名前を見るだけで、デンマークの比較言語学におけるラスクの重要な位置が知られる。

内容に入る前に、ラスクのキリスト教に対する否定的な側面に注目したい。ラスクは、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』のタイトルページには、一番下に R.K.Rask と書いているが、序文に

先立つ謝辞のページでは R.Rask と書いて、ミドルネームの Kristian の K を削除している。ラスクが、オーゼンセ時代に、元々 Rasch であったつづりを、1 文字 1 音という正字法の合理性から、Rask に変えたことはすでに述べたが、ミドルネームの削除に至った過程も興味深い。1812 年 1 月 1 日付のビュロウ宛の手紙の中で、ラスクは唐突につきのようにいっている：「ところで、どんなキリスト教的あるいはユダヤ教的な残留物も私の体に張り付かないように、名前の真ん中のものを捨て去ることにしました」。つまり、Rasmus Kristian Rask のミドルネームの Kristian を削除することによって、Rasmus Rask と名乗り、キリスト教と訣別する決意を示したのである。

しかし、その決意と矛盾するかのように、ラスクは、アイスランド滞在中には、ヘルガソンの教会で説教をした。そして、1818 年のこの著書のタイトルページと謝辞のページでの名前の不整合あるいは使い分けが見られる。1811 年の『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』では、タイトルページは Rasmus Kristian Rask、謝辞のページは R.K.Rask、1817 年の『アングロ・サクソン語文法』(*Angelsaksisk Sproglære*) では、R.K.Rask と R.Rask、懸賞論文より早く出た 1818 年のスウェーデン語によるアイスランド語文法、『アイスランド語あるいは古ノルド語概説』(*Anvisning till Isländskan eller Nordiska Fornspråket*) では、なぜか Rasmus がラテン語名の Erasmus となり、ミドルネームも昔に戻って Christian が用いられ、Erasmus Christian Rask と Er.Chr.Rask と書かれた。1825 年以降の『フリジア語文法』(*Frisisk Sproglære*) 以降、やっと Kristian のない名前に統一される。この名前の表示の仕方の歴史は、キリスト教を否定しようとして迷っていたラスクの姿を、反映しているように思われる。ラスクが、かわいがり、生活のめんどろをみた義弟のハンス・クリスチャンには、大学で神学を学ばせ、聖職者に行っている。ラスクは、キリスト教国に生まれ、大学に入る前はキリスト教の学校に通い、キリスト教とともに

生きながら、物事を合理的に考えようとするあまり、キリスト教の教理に疑問をもった。ラスクは、1816年に、フューン島の篤志家ビュロウを訪ねたとき、来訪者名簿に「二柱の神を / 私は信じるのみ / 自由と友情とを / あとは消え去れ！」という詩を残している。いかにも一神教のキリスト教の神を否定するかのような詩である。ラスクが、まわりの人に、無神論者と見られたとしても不思議ではない。しかし、ラスクは、キリスト教を否定しようとしながら、否定しきれない矛盾の中に生きた。この相克がラスクに与えたストレスは決して小さなものではなかったはずである。

さて、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』の内容は、序論（10ページ）、第1章：語源論全般（46ページ）、第2章：アイスランド語とゴート語派（18ページ）、第3章：ゴート語とくにアイスランド語の起源（241ページ）という構成である（ページ数はイェルムスレウ編『ラスムス・ラスク精選論文集』による）。なお、ラスクが用いている語源論とは、今日の言語の歴史的研究、比較言語学的研究という意味である。現在のデンマーク語の *etymologi*（＝英語 *etymology*）「語源（学）」は、元来ギリシャ語の *etymon*「本質」から派生した用語で、単語の起源を追及すれば物事の本質に迫ることができるという考えから生まれ、単語の由来や単語の由来を研究する分野に限定されているが、ラスクのいう *etymologi*「語源論」は、もっと意味が広く、言語そのものの本質を考える学問分野を意味している。さらに、注記しておかなければならないことがある。それはここでいうゴート語は現在のゲルマン語を指していて、4世紀のウルフィラ（Wulfila）による聖書の翻訳に用いられたゴート族の言語としてのゴート語とは異なることである。まだ、ゲルマン語という用語が確立していない当時、ラスクは印欧語を指す用語、ゲルマン語を指す用語の定着に苦心していた。その結果、ゴート語ならば、ゲルマン民族が活躍した土地全体に適用できると考えたのである（現在の印欧語に

については、ラスクも適当な名称を思いつくことができず、時に応じてカフカス語 (Kaukasisk)、サルマティア語 (Sarmatisk)、ヤペテ語 (Japetisk) を用いたが、どれも後世の認めるところとはならなかった)。全体の構成のページ配分からも分かるように、この論文の主張の中心は第3章にあり、懸賞論文が求めたテーマに応えたものである。第1章と第2章は、第3章の前段となっている。

序論には、ラスクの基本的言語観が披露されている：「私たちが知っている最も初期のころの民族の宗教、習俗、慣習、社会制度は、その民族の近親関係と起源に関する多くの示唆を与えてくれる。彼らが最初に現われた状況は、かならず彼らのそれ以前の状況や彼らが現在の状況に至った様態についての、何らかの結論に私たちを導いてくれる。しかし、歴史の助けが得られない灰色の古代における、民族の起源と近親関係について知るためには、言語ほど重要な手段はない。ひとつの民族は、一世代で、宗教、習俗、慣習、法律、社会制度を変え、教養を身につけるまでに進化したり、再び野蛮と無知にまで退化したりすることが可能であるが、言語は、これらのあらゆる変遷の下でも、何千年もの間、まったく同一ではなくとも、十分認識できるほど、確固たる存在として存続するのである」(pp.20-21)。それ故に、ギリシャ人は変革を経ても、ホメーロスの言語が理解できるのだとし、さらに、まわりの変革が少なければ、言語の変化も少なく、アラブ人がムハンマドの何百年も前のアラビア語を理解し、アイスランド人が中世のサガや吟唱詩を読めるのはそのおかげであると述べている。ラスクにとっては、何百年も前のエッダやサガの時代とほとんど変わらずに残っている現代のアイスランド語は、その起源を探るには、非常に貴重な言語だったのである。

第1章の「語原論全般」で、ラスクは言語を比較する際の重要な要素について述べている。要点をまとめると、言語の比較は、語彙と文法の両面からなされなければならない。しかし、よく似た語彙の類似

があっても、例えば、グリーンランド語の中のデンマーク語のように、信じられないほどの数の単語が言語間を移動することがあるので、表面的な単語の比較は危険である。それに対して、文法の一致の方が確実である：「文法の一致の方が、親族関係や根本的同一性のずっと確実なしるしである。なぜなら、A 言語が B 言語と混ざり合っても、B 言語の語形変化・屈折を取り入れることはほとんどあるいは決してないが、逆に、A 言語はむしろ自分自身の語形変化・屈折を失うからである。例えば、英語はアイスランド語やフランス語の屈折を取り入れなかったが、逆に、アングロ・サクソン語（＝古英語）の古い屈折の多くを失ってしまった。同様に、デンマーク語はドイツ語の語尾を取り入れていないし、スペイン語はゴート語やアラビア語の語尾を取り入れてはいない。しかしながら、最も重要で最も確かなこの一致の分野は、これまで言語の派生という点ではほとんど見過ごされてきた。そしてこのことは、これまでこの問題についての書き物のほとんどに存在している第一義的誤りである。これらの書き物が非常に不確かで、学問的な価値がほとんどないのはここに原因がある」（p.49）。イギリスの支配階級の言語は、デーン王朝の時代にはアイスランド語（正確には、古デンマーク語というべきだが、ラスクは、アイスランド語を、古デンマーク語を含めた古ノルド語の意味で用いている）であったし、ノルマン王朝の時代にはフランス語であったことはよく知られている。その結果、今の英語には、北欧語起源、フランス語起源の単語が数多く借用されているが、北欧語やフランス語の語尾が入ってくることはなかった。一方、英語は、他の言語との接触によって、本来の語尾変化を失ってしまった。この事情は、ドイツ語の影響の強いデンマーク語、一時ゴート族やアラブ人に征服されスペインでも同じだというのである。つまり、A 言語が B 言語に強い影響を受けて、単語の借用が起こっている場合、単語だけを表面的に見ても、A 言語が B 言語から派生したことにはならない。この点がこれまで見落

とされてきた方法論の誤りであるというのがラスクの主張である。

また、「最も総合的な文法を有する言語が最も混ざりけがなく、最も原初的で、最も古く、最も起源に近い」(p.50) ともいう。その理由は、屈折や語尾のような文法的要素は、新しい言語の誕生とともになくなり、新しい組織を発達させるには、長い年月と他の民族とほとんど接触しないことが必要だからだという。その結果、デンマーク語はアイスランド語よりも、現代英語は古英語よりも、現代ギリシャ語は古代ギリシャ語よりも、イタリア語はラテン語よりも、屈折が少ないのだという主張である。

「総合的な文法を有する言語」とは「複雑な屈折をもつ言語」という意味で、今日、言語類型論では、総合語あるいは屈折語と呼ばれている言語を指している。印欧祖語や印欧祖語に近いと考えられているサンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語は、まさにこのタイプに属する。それまでの伝統的なヨーロッパの言語学では、屈折のない単語を有する、例えば中国語のような、孤立語が原初的であると考えられていた。これに文法関係を表わす語尾が付いて、日本語やトルコ語のような膠着語となり、単語と語尾が融合して、単語そのものが変化をする屈折語になったという考えであった。すなわち、ギリシャ語・ラテン語に代表されるヨーロッパの言語が最も進化していると信じられていたのである。ラスクの考え方はこの伝統的言語観と正反対だったのである。イエスベルセンは、『英語の格の研究 付序論：言語の進歩』(*Studier over engelske kasus, med en indledning: Fremskridt i sproget*) で学位を取得し、師トムセンの推挙でコペンハーゲン大学の英語学教授になったが、その根底にある言語観は、イエスベルセンが若いころに心酔したラスクに由来することはよく知られている。イエスベルセンは、ラスク同様、従来の類型的な流れである孤立語→膠着語→屈折語を否定し、逆の屈折語→膠着語→孤立語という流れを主張したのである。イエスベルセンの頭の中には、今日の英語やデンマーク語が屈折を失

いながら成立してきた過程が描かれていたのである。

さらに、他の言語とどんなに混ざり合った言語でも、基礎語彙を共有している場合は、同じ系統に属するといえるが、専門用語、丁寧語、通商用語等では系統は決められない。英語が（多くの借用語を有している）ゲルマン語に属するといえるのは、heaven, earth, sea, land, man, head, hair, eye, hand, foot, horse, cow, calf, ill, good, I, he, make, love, go, see, stand, of, out, from 等の基礎語彙が、ゲルマン語に共通のものだからである。とくに、基礎語彙の中では、代名詞や数詞は、異なった言語と混ざり合っても、消滅しない。例えば、英語は、いくつもの言語と混ざり合ったが、代名詞はすべてゲルマン語起源であるという主張である。

そして、きわめて重要な点は、2言語間の基礎語彙に一致があり、しかも、その一致が一方から他方への音韻（当時は、この音韻という用語はなく、ラスクは文字（*bogstav*）と表現している）の推移の規則を導く出すことができるほど数多い場合には、さらに両言語の構造と組織における類似が見られる場合には、両言語間に基本的な近親関係があると、ラスクが主張していることである。例えば、ギリシャ語 *phēmē* 「声、うわさ」 / *mētēr* 「母」とラテン語 *fāma* 「うわさ、名声」 / *māter* 「母」では、ギリシャ語の *ē* がラテン語では *ā* になり、ギリシャ語 *holkos* 「あぜ溝」 / *bolbos* 「球根」とラテン語 *sulcus* 「あぜ溝」 / *bulbus* 「球根、タマネギ」では、ギリシャ語の *o* がラテン語では *u* となるという規則的な母音の対応がある。両言語をもっと詳しく調べてみると、数多くの対応の規則が見つかる。このような場合は、ギリシャ語とラテン語との間に近親関係を認めることができるというのである。文法の一致、基礎語彙の共有、音韻の対応は、現在ではどれも比較言語学の方法論では当たり前ののだが、19世紀の初めに、ラスクがそのような事実を明言したことは画期的であった。

第2章の「アイスランド語とゴート語派」では、まず、デンマーク、

ノルウェー、スウェーデンで、以前話されていた古ノルド語を、それが現在も古い状態のままアイスランドに残っているので、アイスランド語と呼ぶという 1811 年のアイスランド語文法以来の持論を確認し、アイスランド語（すなわち、古ノルド語）の文法を簡潔にまとめ、アイスランド語と、アイスランド語と近い関係にあるデンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語、フェーロー語を、全体として、ノルド語（nordisk）あるいはスカンディナヴィア語（skandinavisk）と呼ぶと述べている。

ゲルマン語の下位分類については、現在でも諸説があるが、一般には、ドイツの言語学者 A. シュライヒャー（A. Schleicher）（1821 - 68）に由来するといわれている地理的な 3 分法、ノルド語が属する北ゲルマン語、ゴート語が属する東ゲルマン語、英語やドイツ語が属する西ゲルマン語に分類することが多い。3 つの中でも、北ゲルマン語と東ゲルマン語が近い、あるいは、西ゲルマン語と東ゲルマン語が近いという考え方もあり、まだ最終的な結論が出ているわけではない。ゲルマン語の分類に関しては、ラスクは、最後の西ゲルマン語と東ゲルマン語が近いという立場を取り、ノルド語とゲルマン語（germanisk）の 2 分法を採った。そしてゲルマン語を低地ドイツ語と高地ドイツ語とに分け、低地ドイツ語に、英語、オランダ語、フリジア語を属させ、高地ドイツ語に、ドイツ語と（狭い意味での）ゴート語を属させた。

また、これらの言語を総括する現在のゲルマン語の名称については、上述のようにゴート語を主張した。ラスクによれば、ドイツ人には、この名称を認めず、ゲルマン語と呼ぶべきだという人も多いが、ゲルマン語では意味が狭すぎるという。明らかに、ドイツ的な匂いに、ノルド語が含まれるのを嫌ったのである。なお、混乱を避けるために、聖書の翻訳を残しているゴート語にはモエソ・ゴート語（mosogotisk）の名称を用いた。この言語が、ドナウ川の南部のモエ

シア、今日のセルビアやブルガリア近辺、で使われていたからである。ゴート語は、一般に、地理的に東西に分け、モエソ・ゴート語は、現在の西ゴート語に属する。しかし、ラスクの命名は後世に残らず、一時英語ではテュートニック語 (Teutonic) と呼ぶことはあったが、今ではゲルマン語 (英語 Germanic、ドイツ語 Germanisch、デンマーク語 germansk) に落ち着いてしまった。グリムが、その著書『ドイツ語文法』で、Deutsch をドイツ語とゲルマン語の両方を包括する意味で用いていたことはすでに述べたが、現在のドイツ語では、ドイツ語 : Deutsch、ゲルマン語 : Germanisch という使い分けが定着した。デンマーク語でも、ドイツ語 : tysk、ゲルマン語 : germansk という区別が明確に行われている。ところが英語では、ラスクの用語のゴート語がモエソ・ゴート語と混同され易かったように、ドイツ語 : German とゲルマン語 : Germanic が混同されやすい。ゲルマン語が選ばれ、ラスクのゴート語が選ばれなかった理由は、ゴート語とモエソ・ゴート語という言語上のあいまいさだけではなく、ラスクの主張がデンマーク語でなされたために、広く世に知られなかったせいもあるのではないかとと思われる。

論文の中心となる第3章「ゴート語とくにアイスランド語の起源」では、インド・ヨーロッパ語族 (当時この名称はなかったが) におけるゴート語 (=ゲルマン語) の位置、さらにアイスランド語の位置を論じて、その起源に迫ろうとしている。ラスクはまずゲルマン民族が接触した言語の検証から始める。グリーンランド語、ケルト語、バスク語、フィン諸語、スラブ語、ラトビア語、トラキア語、アジアの諸言語の順に語彙と文法の比較を行っている。

その結果、グリーンランド語、バスク語、フィンランド語は明らかにゲルマン語とは異なる系統であると断言する。明らかな語彙と文法の違いがあるため、グリーンランド語に関する記述は少ないが、ラスクのこの言語に関する洞察力は優れたものがあつた。ラスクは、後に

アリューシャン列島の言語、アリュート語も研究するのだが、グリーンランド語とアリュート語の近親関係を見抜いていたのである。このことに関して、亀井・河野・千野編『言語学大辞典：世界言語編』第1巻のエスキモー・アリュート語族の項に、「両言語の同系性を科学的に明らかにしようとしたのは、おそらくラスク（R.Rask）が最初であろう。早くからグリーンランド語（東エスキモー語）文法に親しんでいた彼は、ペテルブルグで会ったと推定されている2人のアリュートから採集した資料を「アリュート語およびそのグリーンランド語との一致の記録」という覚え書（1820）にまとめている。約1世紀後にはじめて W. タールビツァが注目し、出版したこの「記録」において、ラスクは、約200のアリュート語の語詞をあげ、グリーンランド語との若干の類似（屈折接尾辞、数詞など）を断片的に指摘している。出版のために完成した草稿とはいいいがたく、両言語の関係については一言も語られてはいないが、ラスクの意図が同系性の証拠を集めることにあった点は十分にうかがえる。」（pp.910-11）という記述がある。ここでは、ラスクの先見的な洞察力が証明されているが、同時に、ラスクが使用言語をデンマーク語にこだわったことにより、貴重な成果が世間に知られるのが遅れるという負の側面が、またもや明らかとなっている。

この2人のアリュートについては、ペテルブルグにいたときのラスクの日記に触れられている。1818年4月に、ラスクはロシアの探査船ルーリック号の乗組員と知り合いになり、アメリカの商社に雇われている2人のアリュートの話は聞いていたが、その年の12月にルーリック号が、その2人を乗せてベーリング海峡から戻ってきた。1818年12月23日-24日の日記には、「[乗組員のひとり]が」私のところに来て、ルーリック号に乗ってきたアリュートたちを、明日の午前中に私のもとに寄越すと約束した。しかし、彼らは来なかったで、午後になって、シリング（ペテルブルグ在住のドイツ人商人）を訪ね、

午後4時に彼といっしょにエンドウ農場のアメリカの商社に行った。すぐにシャルケルという名前のアリユートの若者に会ったが、自分たちを連れ出すには監督官の許可が必要だといった。監督官が許可してくれたので、2人とも私についてきて、家でお茶を飲んだ。彼らがアリユート語の単語を発音してみせ、その後で彼らにロシア語で質問することで、小さな単語集ができ上がった。彼らを港まで送って行った。」と記されている。ラスクは、アリユートたちにアリユート語を発音させ、その意味をロシア語で質問することによって、アリユート語・ロシア語の単語集を作ったのである。12月26日の日記には「そのつぎは、彼らは自ら再びやってきた。」とある。おそらく、ラスクは、その後も何度か家を訪れたアリユート人たちと会って、彼らから直接アリユート語を学んだと思われる。1919年1月の日記（日にちは書かれていない）には「私はアリユートの若者（マルケル）に彼の言語に合わせたローマ文字を教えようとし、彼のために地図と本を買ったが、都合が悪くなって来なかった。」と記されている。しかし、この1月の日記を最後に、ぱったりとアリユート人に関する記述がなくなった。ルーリック号が突然出航したのかもしれないが、もしかしたら、アリユートたちがラスクの貪欲な知識欲に辟易したのかもしれないし、ローマ文字を教えようとするようなラスクの姿勢は若いアリユートには迷惑だったのかもしれない。どちらにしても、資料や辞書が何もない言語を学ぶのに、ネイティヴ・スピーカーをうまく活用しようとする、ラスク特有の生きた言語の習得方法の具体例がここにある。なお、内容が2日に亘ったり、日にちがなかったりしているのは、ラスクが日記を書いた後で日付を入れる習慣による。

フィン諸語 (finnisk) は、フィンランド語、ハンガリー語、ラップランド語を含む今日のフィノ・ウゴル語に相当するが、ラスクはこの中にフィンランド語 (finnsk) とラップランド語を含ませている。フィン諸語に finnisk とフィンランド語に finnsk を用いることによって、

言語の括り方に工夫を凝らしているのが分かるが、このフィン諸語を表わす単語は、現在のデンマーク語では用いられていない。ここでもラスクの命名は成功しなかったのである。1812年のスウェーデン旅行で、フィンランド語とラップランド語を習得したのは、この論文の資料として用いるための準備であった。当時、ラスクの頭の中では、すでに論文の枠組みの構想が出来上がっていたことになる。なお、今日では当然のことにように受けとめられているが、フィンランド語、ハンガリー語、ラップランド語の同系性を認めたのは、ラスクが最初であった。

ラスクは、ケルト語に関しては、語彙の共通性は、ケルト語がゲルマン語から借用したものと考え、文法構造の違いが大きいと思ったこともあって、迷った末にアイスランド語との同系性に疑問をもつ。これに関しては、イエスベルセンは、ラスク伝の中で、当時は資料としては形の崩れたキムリック語（ウェールズ語のことで、英語の Cymru [カムリー] はウェールズ語でウェールズのこと）しか入手できなかったため、仕方がないことだとラスクに同情的なコメントをしている。そして、ラスクは、後に自分の間違いに気づき、1818年6月11日付の手紙で、ケルト語もアイスランド語と同じ系統に属することを認めたと述べ、ケルト語がインド・ヨーロッパ語族に属することは、1831年のイギリスの人類学者 J.C. プリチャード (J.C.Prichard) (1786-1848)、1837年のスイスの言語学者 A. ピクテ (A.Pictet) (1799-1875)、1838年のラスク、グリムとともに比較言語学の創始者と称されるボップらの論文によって、初めて証明されたとしている。イエスベルセンの記述は、ラスクは、それらの論文以前に、ケルト語の系統に対する正しい認識をもっていたことを取えて示そうとしたものである。なお、1818年の手紙とは、コペンハーゲン大学の神学教授 P.E. ミュラー宛のもので、その中でラスクは、今日の語派名・言語名で表わせば、インド語、イラン語、ギリシャ・ラテン語、バルト・ス

ラブ語、ゲルマン語とともに、ケルト語をインド・ヨーロッパ語族に含めている。また、アルバニア語の同系性は認めていないが、アルメニア語のイラン語との同系性を認めている。アルバニア語にしても、資料いかなではその同系性を認めることはやぶさかではなかったはずである。今日では、インドヨーロッパ語族を、インド語派、イラン語派、ギリシャ語派、イタリック語派（ラテン語を始めとするロマンス諸語）、ケルト語派、スラブ語派、バルト語派、ゲルマン語派、アルメニア語派、アルバニア語派、ヒッタイト（アナトリア）語派、トカラ語派の12の語派に分類することが一般的であるが、最後の2つ、ヒッタイト語とトカラ語が発見されたのは、20世紀の初頭で、ラスクの時代にはその存在が未知だったことを考えれば、ラスクはすでにインド・ヨーロッパ語族の全容を把握していたといえる。

しかも、ラスクは、インド・ヨーロッパ語族ばかりでなく、世界の言語を系統別に分類しようとしていた。今日、世界の言語を、系統の不明な言語を除けば、インド・ヨーロッパ語族、アフロ・アジア語族（ヘブライ語、アラビア語等）、アルタイ語族（トルコ語、モンゴル語等）、ウラル語族（フィンランド語、ハンガリー語等）、シナ・チベット語族（中国語、チベット語等）、ドラヴィダ語族（タミール語、テルグ語等）、オーストロネシア（マライ・ポリネシア）語族（マレー語、太平洋上の島々の諸言語）、バンツー語族（スワヒリ語、コンゴ語等）の8つに大別することが多いが、若干のあいまいさと名称の違いはあるものの、ラスクの分類は、基本的にはほとんど同じである。ラスクは、この1818年の時点で、限られた言語資料や文法書を基に、自分自身が直接にネイティブ・スピーカーから言語を習得することによって、他の言語学者の協力なしにただひとりで、音韻、文法、基礎語彙の比較という方法で、世界の言語の分類を試み、ほとんど成功していたのである。

さらに、ラスクは、スラブ語とリトアニア語（今日でいうバルト語）

は、語彙と文法の類似性を詳細に述べ、ゲルマン語との同系性を認めている。つぎのトラキア語とは、ギリシャ語とラテン語を含む語派のことである。当時は、ギリシャ語の影響の多いラテン語を、今日よりも近い関係の言語と分類するのが一般的であったが、変革者ラスクにはめずらしく、トラキア語という名称で、ギリシャ語とラテン語をひとつに括っている。現在では、このふたつの言語が、ギリシャ語派とイタリック語派に分けられるのは上記のとおりである。ラスクは、トラキア語のまとめとして、アイスランド語は古トラキア語に源を発し、その主たる構成要素もトラキア語から生まれているので、古トラキア語をアイスランド語の起源とみなさなければならないと結論付けている。ラスクも、この時点では、ギリシャ語・ラテン語を重視しすぎる流れに抗しきれなかったようである。

最後の、アジア諸語についての記述は少ない。アジア語といっても、ラスクの関心は事実上、インド語とイラン語にあった。しかし、このときはまだ、ヨーロッパでは、サンスクリット語やペルシャ語の資料が少なく、文法や辞書も得られない時代ではあったが、ラスクは簡潔に「これらの言語が、大部分はトラキア語をとおして間接的にだが、ゲルマン語（＝西ゲルマン語）とノルド語と、多くの顕著な一致点をもっていることは否定できない」（p.326）と述べて、近親関係の存在を明確に認めている。ラスクは、1814年にこの論文を書き終えたとき、後年、その少ない言語資料を求めて、インド語やイラン語の調査・研究のために旅立つことになろうとは、夢にも思っていなかったはずである。

そして、何といても、第3章で重要なことは、ラスクがギリシャ語・ラテン語とアイスランド語との間に子音の対応があることを指摘した事実である。いわゆる、グリムの法則の発見である。ギリシャ語・ラテン語の子音がアイスランド語でどう推移したのかを示すラスクの説明は以下のとおりである。ただし、ラスクの表わし方は、例え

ば、 π til f のようになっている。これは英語の p to f に相当するが、ここではギリシャ文字はローマ文字に、デンマーク語の til 「…へ」は、現在の慣例にしたがって、> の記号を用いて表わすことにする。アイスランド語の þ は、ルーン文字以来の文字だが、英語の th [θ] に対応する。アイスランド語には、1225 年ごろ、従来のアルファベットに、ローマ文字の d に横棒を入れてできた þ の有声音を表わす ð[ð] という文字が追加されたが、ラスクはここでは ð を用いずに d (発音は [ð]) を用いている。したがって、最初の例のアイスランド語 fadir は、一般には faðir とつづられる。古ノルド語でも現代アイスランド語でも、faðir や bróðir のように、普通に ð を用いるのに、なぜラスクが敢えて fadir や bródir のようなつづりの方を選んだのかは判然としない (ただし、アイスランド語の対をなす有声子音と無声子音、g と k、b と p、v と f、d と t、ð と þ を解説する箇所 (p.73) で、ð という文字は、デンマーク語・ノルウェー語・スウェーデン語では用いられなくなり、dh を経て d になることには言及している)。なお、ラスクは各推移にそれぞれいくつかの例を挙げているが、ここではそのうちの明確な 1 例のみを示すことにする。

p > f : ギリシャ語 patēr / アイスランド語 fadir 「父」

t > þ : ギリシャ語 treis / アイスランド語 þrír 「3」(数詞)

k > h : ラテン語 cornu / アイスランド語 horn

(ラテン語の c は k の音)「角(つの)」

b : 通常は保たれる

d > t : ラテン語 dignus 「価値ある」/

アイスランド語 tigginn 「高貴な」

g > k : ギリシャ語 gunē / アイスランド語 kona 「女; 妻」

ph > b : ギリシャ語 pherō / アイスランド語 ber 「(私は) 運ぶ」

th > d : ギリシャ語 thurē / アイスランド語 dyr 「戸」

kh > g : ギリシャ語 kholē / アイスランド語 gall「胆汁」

h > s : ギリシャ語 hupnos / アイスランド語 svefn「眠り」

ただし、語中や母音間では、しばしば k > g (例えば、ラテン語 macer > アイスランド語 mager「やせた」、ラテン語 taceo「私が黙っている」> アイスランド語 begi「黙っている」、t > d (例えば、ラテン語 pater > アイスランド語 fadir「父」、ラテン語 frater > アイスランド語 bródir「兄弟」) 等となる (p.188)。

また、ラスクは第2章の「アイスランド語とゴート語派」の高地ドイツ語が他のゲルマン語と異なりさらに音が推移するという事に言及した箇所 (p.84) で、アイスランド語の子音とドイツ語との間に以下のような対応関係があることを示している。

p > ph : アイスランド語 kopar「銅」/ ドイツ語 Kupfer「銅」

t > z : アイスランド語 tollr「税金」/ ドイツ語 Zoll「関税」

k > ch : アイスランド語 víkja「曲がる」/

ドイツ語 weichen「道を譲る」

この一連の子音の推移の中で、ラスクが3つの用例を挙げながら、ギリシャ語・ラテン語の b は通常は保たれるとしたことは、現代の言語学では誤りとされる。また、ペーザーセンは、『ラスムス・ラスク精選論文集』の序文で、ラスクが挙げた b に関する用例はどれも間違っていると指摘しながら、ギリシャ語・ラテン語とゲルマン語の比較のために挙げた自然界の無生物を表わす名詞のリストの中に、「麻」を意味するギリシャ語 kannabis とアイスランド語 hanpur という正しい子音の対応を示す単語があるので、ラスクがギリシャ語 b とゲルマン語 p の対応の用例に気づかなかったというのは当を得ていないという。しかし、b > p の推移を示す用例は、とくに語頭では極めてまれで、ラスクは図式を整えるのに、実例がない経験論だけで済ませ

うとすることを潔しとしなかったのである。

なお、上記の図式の「ただし」以下は、この子音推移の例外を示したものである。結局、ラスクもグリムも認識しながら説明できなかった、グリムの法則のこの例外は、後にデンマーク人言語学者カール・ヴェルナー (Karl Verner) (1846-96) による 1876 年の「第一次音推移の例外」("Eine ausnahme der ersten lautverschiebung") と題する論文で説明された。ヴェルナーは、印欧祖語におけるアクセントの関与を想定し、該当の子音の直前にアクセントがあればグリムの法則は守られるが、アクセントが後にきた場合には、ゲルマン祖語では母音間の p, t, k は f, θ, h の有声音となる (つづりではしばしば b, d, g で現われる) というものであった。上の用例の macer と mager, taceo と begi では、c[k] と g の対応にヴェルナーの法則が適用される。ただし、pater と fadir, frater と bróðir については、別の事情がある。印欧祖語の「父」を表わす形は *pātēr で、アクセントは t の後ろにあったと推定されている。したがって、ヴェルナーの法則によって、ゲルマン祖語では *faðēr となり、アイスランド語でも faðir (ラスクは fadir とつづっているが) となる。ところが、「兄弟」を意味する印欧祖語は *bhrāter で、アクセントは t の直前にあったと考えられているので、グリムの法則のとおり、ゲルマン祖語では *brōþor となり、ゴート語でも brōþor として残っている。アイスランド語でも *bróþir として残るはずであったが、ヴェルナーの法則とは無関係に、後に母音間の無声子音が有声化し、bróðir (ラスクでは bródir) となった。その意味で、ラスクが示した、frater と bródir は、グリムの法則の例外としては、性質が異なるものであるが、当時はこのような事実は知られていなかった。

ラスクの『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』は、デンマーク学士院がデンマーク語で趣旨説明をし、公募した懸賞論文

に応募したのだから、用いた言語がデンマークであったことはきわめて自然だったのだが、この事実と、この論文が1814年に書き上げられながら、刊行されたのが1818年になったことが、ラスクの運命を二重に悲劇的にしてしまったことはすでに述べた。グリムを一躍有名にした『ドイツ語文法』第1巻の第2版は1822年に出版されたが、これはラスクの『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』を参考にして改訂されたものであった。グリムは、ラスクが第3章で示したギリシャ語・ラテン語とゲルマン語の子音の対応と、第2章で一部示した高地ドイツ語独自の子音の変化を合体させて、ギリシャ語・ラテン語⇒ゲルマン語⇒高地ドイツ語という3段階方式で図示した。ラスクはゲルマン祖語 p, t, k は高地ドイツ語ではそれぞれ ph, z, ch になる例を挙げているが、グリムは、ドイツ語の立場から、d > t, th > d 等の例も加えて、規則性を明確に、さらに体系的に表わそうとしたのである。したがって、ラスクはギリシャ語・ラテン語とゲルマン語の子音の対応関係を法則化し、一方、グリムは、ラスクの法則を応用して、ドイツ語の子音の歴史的推移を法則化した。そして、印欧祖語とゲルマン祖語の子音の対応という視点からこの法則を見ると、(1) 法則の発見：ラスク、(2) 法則の発展：グリム、(3) 法則の修正：ヴェルナーという発見の手順を経たといえる。

『ドイツ語文法』第1巻の第2版で、ギリシャ語とゲルマン語の子音対応に、古高地ドイツ語を加えて、ひとつにまとめたグリムの示した図式は以下のとおりである (p.498)。

ギリシャ語	P	B	F		T	D	TH		K	G	CH
ゴート語	F	P	B		TH	T	D			K	G
古高地ドイツ	B(V)	F	P		D	Z	T		G	CH	K

ラスクは、法則の証明のために用いたゲルマン語の代表としては、懸賞論文の趣旨に沿って、アイスランド語を選んだが、グリムはゴート語を選択している。グリムは、ラスクが「通常保たれる」としたギリシャ語の b は、ゴート語では p として現われるものとして、 $b > p$ の推移を想定している。図式上そうあるべきだという判断からであったと思われるが、それを証明する用例は挙げていない。グリムは、 $b > p$ の推移を作業仮説として考えていた。また、ラスクが示した $k > h$ の推移については、グリムはゴート語を空欄にしている。用例のない $b > p$ を認めたにもかかわらず、この点では、グリムは明らかにバランスを欠いている。グリムは、この時点では、法則の一貫性にまだ完全には気づいていなかったと思われるが、後にこの空白に CH を補うことになる。ドイツ語で書かれたグリムのこの著書は、すぐに世界中の多くの言語学者に読まれ、グリムは、印欧祖語とゲルマン語との間に見られる子音の対応の法則の発見者として世に知られることとなった。その結果、この法則の名前が「グリムの法則」と一般に呼ばれることになったのである。ただし、当時はまだ印欧祖語という概念はなく、それに近い言語の代表としてギリシャ語とラテン語が選ばれていた。ギリシャ語やラテン語とともに、初期のころの印欧語の言語の状態を残しているサンスクリット語が十分に研究されていなかったときのことである。

今日では、ラスクやグリムがインド・ヨーロッパ語族の原初的用例としてあげたギリシャ語・ラテン語の代わりに、その抽象化された存在である印欧祖語が、アイスランド語やゴート語の代わりに、同様に抽象化されたゲルマン祖語が用いられる。イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語等のイタリアック語派の言語にはラテン語という資料の残っている親言語、すなわち、祖語がある。しかし、英語、ドイツ語、デンマーク語、スウェーデン語等のゲルマ

ン語には、親言語が存在しない。そこで、現存するゲルマン諸語から、共通の文法的要素を抽出して理論的に再建したものがゲルマン祖語である。そして、ゲルマン祖語、サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語等を抽象して印欧祖語が再建された。ラスクやグリムの研究の成果に基づいて、俗にグリムの法則と呼ばれる、ゲルマン語の第一次子音推移、すなわち、印欧祖語とゲルマン祖語との対応関係の法則を図示するとつぎのとおりである。下記の IE は印欧祖語、Gmc はゲルマン祖語を表わす。

IE		Gmc	IE		Gmc	IE		Gmc
p	>	f	b	>	p	b ^h	>	b
t	>	θ	d	>	t	d ^h	>	d
k	>	h	g	>	k	g ^h	>	g
k ^w	>	h ^w	g ^w	>	k ^w	g ^{wh}	>	g ^w

これだけではあまりに抽象的過ぎて、ラスクが発見したこの法則の意義が判然としない。このうちの一部だけだが、ゲルマン語の中で最も普及している英語と関連する実例を挙げる。英語はヨーロッパの言語の中で最も外国語の影響を受けた言語のひとつで、語彙の面では、とくにラテン語・フランス語の影響を受けた。この子音推移の法則をとおして、英語の中のゲルマン語的要素とギリシャ語・ラテン語的要素の混在を、具体例を見ながら概観し、単なる子音推移の法則が、実際にはいかに大きな広がりをもつ法則であるかを確認する。

IE p > Gmc f の例：

印欧祖語 *pet- 「飛ぶ」	印欧祖語 *pāter- 「父」
ギリシャ語 pteron 「羽」	ギリシャ語 patēr 「父」
ラテン語 penna 「羽」	ラテン語 pater 「父」
英語 feather 「羽」、fin 「ひれ」	英語 father 「父」

語頭の p- と f- の対応に注目する。ギリシャ語の pteron では母音がなくなって *pet- が *pt- と短くなっているが、子音は保たれている。このように、印欧祖語から派生する場合には、母音が強く現われる場合と、母音が弱くなったり、なくなってしまったりすることがある。「羽」という意味は「飛ぶために使うもの」の意味から派生し、「ひれ」の意味は「羽」と形が似ていることからの連想である。英語の pen「ペン」は、ラテン語 penna（元々は *petna であったが penna に変化した）が、フランス語を経由して、借用されたものだが、元来はガチョウの羽根をペンとして使ったことに由来する。また、helicopter「ヘリコプター」の -pt- も同語源で「らせん状に (helico-) 飛ぶもの」が原義である。また、「父親の」を意味する paternal はラテン語 pater の形容詞が借用されたものである。

IE t > Gmc θ の例：

印欧祖語 *trei- 「3」	印欧祖語 *ten- 「引き伸ばす」
ギリシャ語 treis 「3」	ギリシャ語 teinein 「引き伸ばす」
ラテン語 tres 「3」	ラテン語 tendere 「引き伸ばす」
英語 three 「3」	英語 thin 「薄い」

語頭の t- と th- [θ] の対応に注目してみると、数詞の「3」については、その対応が明白である。印欧祖語の *ten- 「引き伸ばす」から派生した、ギリシャ語 teinein、ラテン語 tendere も分かりやすい。ギリシャ語起源の英語の単語には「伸びる筋肉」という意味で tendon 「腱(けん)」、ラテン語起源の単語には、「…の方へ伸びる、向かう」の意味から tend 「…の傾向がある」、「引っ張ると柔らかくなる」ことから tender 「柔らかい、優しい」、「張りつめた」という意味から tense 「緊張した」、「張られたもの」という意味から tent 「テント」などがある。

また、英語の thin 「薄い」 は物は「引き伸ばすと薄くなる」ことからきている。

IE k > Gmc h の例：

印欧祖語 *kap- 「つかむ」	印欧祖語 *ker- 「角(つの)」
ラテン語 capere 「取る」	ラテン語 cornu 「角(つの)」
英語 have 「持つ」	英語 horn 「角(つの)」
heave 「持ち上げる」	

語頭の k- と h- に注目する。英語では、have のほか、「持つところ」という意味から haft 「柄(え)」、「船をしっかりと保持しておく場所」という意味から haven 「港、避難所」、「獲物を捕まえる者」という意味から hawk 「タカ」、「中身をたくさんもっている」ことから heavy 「重い」なども同語源である。「取る」ことに関係するラテン語起源の語には、capture 「捕獲(する)」、captive 「捕らえられた；捕虜」がある。なお、英語の corn 「穀物、トウモロコシ」は英語本来の単語だが、corn 「(足指の)うおのめ」はラテン語 cornu からの借用語で、「うおのめ」が「角(つの)」のような形をしていることからきている。

IE k^w > Gmc h^w の例：

印欧祖語 *k ^w o- 疑問詞の構成要素	印欧祖語 *k ^w eiā- 「休む」
ラテン語 quid 「何」	ラテン語 quies 「静止、休息」
英語 what (古英語 hwæt) 「何」	英語 while 「間；…する間」
(デンマーク語 hvad 「何」)	(デンマーク語 hvile 「休息」)

語頭の kw-(=qu-) と hw- の対応に注目する。古英語の hw- は中英

語で h- が発音されなくなり、つづりも w- あるいは wh- になった。また、while の原義は「休息」で、「(休息する) 間、時間」の意味となり、さらに接続詞の「…する間」という意味も生まれた。したがって、while とラテン語起源の quiet「静かな」は同語源ということになる。

IE d > Gmc t の例：

印欧祖語 *dent-「歯」	印欧祖語 *dekṃ-「10」
ギリシャ語 odous (語幹は odont-)「歯」	ギリシャ語 deka「10」
ラテン語 dens (語幹は dent-)「歯」	ラテン語 decem「10」
英語 tooth「歯」	英語 ten「10」
(デンマーク語 tand「歯」)	

語頭の d- と t- の対応に注目する。ギリシャ語 odous の語頭の母音は古い形を残しているもので、印欧祖語の *ed-, *od-「食べる」に遡ることができる。ラテン語からの借用語 edible「食べられる」、英語の eat「食べる」はその派生語である。したがって、「歯」の原義は「食べるためのもの」である。ラテン語からの借用語に dentist「歯医者」、dental「歯の」がある。つまり、tooth と dentist は外見は異なるが、インド・ヨーロッパ語族の中では、同語源だということが分かる。数詞の「10」については、ゲルマン祖語で *texan あるいは *texun となり、中間の音がなくなって ten となったと考えられている。なお、d > t のほか、印欧祖語の k が χ(=h) となる推移も規則どおりである。

IE g > IE Gmc k の例：

印欧祖語 *gen-「生む」	印欧祖語 *gnō-「知る」
ギリシャ語 genesis「発生、創世記」	ギリシャ語 gnōsis「知、知識」
ラテン語 (g)natus「生まれた」	ラテン語 (g)narus「知っている」
英語 kind「種」、kindred「血縁」	英語 know「知る」、can「…できる」

語頭の g- と k- との対応に注目する。「生まれ」が同じものが「種」で、「血縁」があることになる。同様に、homogeneous「同種の」は生まれが同じ (homo-) ことをいう。形容詞の kind は「生まれつき優しい」が原義である。ラテン語からの借用語としては、generate「生み出す」、generation「生殖、世代」、gentle「生まれが良い、優しい」なども同語源である。また、g- がとれた natus から「生まれたままの状態」という意味で nature「自然」、natural「自然の」、native「出生地の」等が派生し、フランス語を経て中間の t が落ちた naïve「生まれたままの、ナイーブな」が、英語に借用されている。ギリシャ語 gnōsis「知識」は gnosis の形で「霊的認識」という意味で借用されている。ラテン語からは、g- がとれた narus から narrate「知らせる、話す」、narration「物語、ナレーション」が借用されている。また、can「…できる」は、「…をする方法を知っている」という意味で know「知る」と同語源であることが分かる。

IE g^w > Gmc k^w の例：

印欧祖語 *g^wen-「女」

ギリシャ語 gunē「女」

英語 queen「女王」

(デンマーク語 kone「女、妻」)

印欧祖語 *g^weiə-「生きる」

ギリシャ語 bios「生」

ラテン語 vivus「生きている」

英語 quick「速い」

語頭の印欧祖語 g^w- と k^w- (=qu-) との対応に注目する。ギリシャ語では、後続の母音によって g- になったり、b- になったり、d- になったりするため、不規則な印象を与えている。ラテン語では規則的に v- になるが、これは g^w- の w- の部分だけが残ったもので、ラテン語では v=u であった。ギリシャ語起源の英語の単語としては、misogyny「女嫌い」(miso-「嫌悪」)、polygyny「一夫多妻」(poly-「多い」)がある。英語の queen は特殊な女性だが、同じように特殊な女性を表わす

quean「《古》はすっぱな女、売春婦」も同語源である。単語の意味は時代とともに、良い意味に変わったり、悪い意味に変わったりするが、queen と quean に関しては、同語源の単語の意味が、二極化している例である。英語の quick は古英語では「生きている」という意味だったが「生き生きしている、活発な」を経て「速い」という意味になった。「水銀」を表わす quicksilver はすでに古英語にあった単語だが、「生きている銀」の意味のラテン語 argentum vivum (argentum「銀」)を翻訳借用したものである。

IE $b^h > \text{Gmc } b$ の例：

印欧祖語 * b^h er-「運ぶ」	印欧祖語 * b^h āgo-「ブナ」
ギリシャ語 pherein「運ぶ」	ギリシャ語 phēgos「カシの一種」
ラテン語 ferre「運ぶ」	ラテン語 fagus「ブナ」
英語 bear「運ぶ」	英語 beech「ブナ」、book「本」

語頭の印欧祖語 b^h - と b - との対応に注目する。英語は法則どおりに対応しているが、ギリシャ語は内部の規則で ph -、ラテン語でも同様に規則的に f - になる。英語で beech「ブナ」と book「本」とが同語源なのは、ゲルマン人は昔ブナの木の新皮の裏に文字を書いたことに由来すると考えられている。

IE $d^h > \text{Gmc } d$ の例：

印欧祖語 * d^h ē-「置く」	印欧祖語 * d^h wer-「戸」
ギリシャ語 thesis「置くこと」	ギリシャ語 thurā「戸」
ラテン語 factum「なされたこと」	ラテン語 forum「広場、市場」
英語 do「する」、deed「行為」	英語 door「戸」

語頭の d^h - と d - との対応に注目する。英語では法則どおりの推移が

見られるが、ギリシャ語では独自の規則で th-、ラテン語でも同様に規則的に f- になる。ギリシャ語 thesis はそのままの形で「置かれたもの」の意味を経て「命題、主張、論文」の意味で借用され、ラテン語 factum はそのままの形で「(法律用語で) 事実」という意味で借用され、語尾がなくなって fact 「事実」という形でも借用されている。なお、ラテン語 forum はもともと「戸外の広場」を意味していた。

IE $g^h > Gmc\ g$ の例：

印欧祖語 * g^h el-「輝く」	印欧祖語 * g^h osti-「見知らぬ人、客」
ギリシャ語 khōlē「胆汁」	ラテン語 hostis「敵」
英語 gall「胆汁」	英語 guest「客」

語頭の g^h - と g - との対応に注目する。英語では法則どおりの対応関係が見られるが、ギリシャ語では独自の規則で kh-、ラテン語でも同様に規則的に h- になる。印欧祖語の「輝く」という意味から「胆汁」の意味への変化は、「胆汁が黄色に輝く」ことからの連想によると考えられている。また、ラテン語 hostis「敵」と英語 guest「客」とは大きく意味が異なるように思われるが、「見知らぬ人」は、もてなす場合には「客」になり、戦う相手の場合には「敵」にもなることからきている。英語にはラテン語から、hostile「敵の」とともに、host「主人」、hostel「簡易宿泊所」、hotel「ホテル」、hospital「病院」等の「客をもてなす」という点で共通した単語が借用されている。

要するに、feather と pen、father と paternal、thin と tender、have と capture、while と quiet、tooth と dentist、kind と nature、deed と fact、guest と host 等のように、一見無関係に見える単語同士が、実はインド・ヨーロッパ語族という枠組みの中では、同じ語源をもつということが分かる。このように、ラスクの発見に端を発した

印欧語とゲルマン語の子音の対応関係の法則は、その歴史的経緯のためにゲルマン語起源の本来の英語の語彙とギリシャ語・ラテン起源の借用された語彙が混在している現代の英語の中に、とくに整然と生きている。ドイツ語やフランス語のような、言語純正主義の立場を取らなかった英語では、ゲルマン語的要素とギリシャ語・ラテン語的要素が共存しやすかったのである。法則は、発見されてしまうと、いわゆる「コロンブスの卵」のように、当たり前のもののように感じられるが、初めてその法則性に気づくことは容易ではない。法則は発見されてみれば当たり前のことのように思えるという逆説も説得力がある。そして、この法則の発見によって、後に音韻法則の研究という比較言語学の方法論のひとつが確立した。それまでの非科学的な系統論から離れて、インド・ヨーロッパ語族の系統の科学的な解明につながったのである。言語を比較して同系性を検証するためには、音韻の規則的対応が必要だというラスクの主張が認められたのである。この言語学のパラダイムを変えてしまった法則の発見は、ラスクの鋭い洞察力と稀有な創造力の賜物だったのである。

さて、1813年の秋から1815年の秋までの2年間、厳しく凍てつくようなアイスランドの自然を、友人や知人の温かい友情や心遣いで生き抜いたラスクは、また暗いコペンハーゲンに戻ったのだが、明るい話題もあった。コペンハーゲンに戻ってありがたかったのは、大学図書館の司書補であった身分が、留守の間に筆頭司書補に昇格していたことであった。その200リーズターラという年俸は決して多くはなかったが、収入が倍増したことで、何とか義弟ハンス・クリスチャンのめんどろをみることはできそうであった。ラスクは、ハンス・クリスチャンは、頭もいいし、自分流に教育してみたい、少なくとも勉強を見守ってやりたいと思えるようになった。経済的困窮と研究ポストを得ることのできない立場のラスクには、家族のめんどろをみたくと

もみられない状況が続いていただけに、一定の収入が保証されるということとはありがたかった。

しかし、ラスクにとってのコペンハーゲンの暗さは別の所にあった。それはラスクの学問的評価に係わる深刻な問題である。ラスクがコペンハーゲンに戻った1815年の秋には、すでに懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』は最優秀賞を受賞していたものの、刊行の予定はなかった。アイスランド滞在中に完成していた古英語の文法、スウェーデン語文法、アイスランド語の詞華集等の出版もままならなかった。当時は、印刷所の経営保障のために、事前の購入予定者の数が確認できることが条件であった。新しい貨幣制度の下で経済の再建が始まったばかりのデンマークでは、まだ学問的評価の定まらないラスクやラスクの著作で、印刷所が冒険を犯すことを躊躇したとしても仕方のないことであった。しかし、ラスクは、北欧の貴重な学問的遺産であるアイスランド語の重要性を世間に理解してもらいたかった。アイスランド語に学問的立場から精通しているのは、自分だけであるという自負もあった。ラスクは、自分の主張する学問が、自分自身の学問的価値が、正当に評価されない環境に、どうしようもないもどかしさを感じ、絶望を感じ始めていた。1816年4月18日付のスウェーデン在住のアフセーリウス宛の手紙では、「私には何もすることがありません。それで、冬の間はその自由な時間をギリシャ語文法、サンスクリット語その他に使いました。」と、虚無的とも思える調子で、アイスランドからコペンハーゲンに戻った1815年の冬の所在無さと空虚感を吐露している。

このアフセーリウスへの手紙の書き出しはこうである：「親愛なる友よ。君の興味深い手紙と、君が示してくれたすべてのすべての善意に感謝します。あなたの善意にすがればいいのですが。(中略)しかし、私がストックホルムに戻りたがっているという、そのうわさがどこから出ているのか私には分かりません」。このようにいいながら、

ラスクは、ストックホルムの忘れることのできない友人たちには会いたいのだけれど、「私の現在のポストやその他もろもろの状況のために、今はそれはできません。私が短い旅行に出れば、私のアイスランド語に関する期待している権益は消滅してしまうでしょうし、費用も問題になります。私が1年間、あるいは半年間でも、旅行に出れば、おそらく筆頭司書補というここでの職を失うことになります。この職それ自体はささやかなものではありませんが、家賃のいらない本当に小さな3部屋の住居やその他もろもろの便益と結びついています。」と述べ、2年以上もアイスランドで研究させてもらったすぐ後で、半年であっても再び外国旅行に出かけると、留守の間にせっかく昇格したポストも失いかねないという身動きの取れない立場を訴え、さらに、前述の義弟のめんどろをみななければいけない家庭の事情を説明している。

ラスクがいうアフセーリウスの善意とは、文面から推測すると、ラスクがデンマークでの境遇に不満を感じ、国外で、とくに、ストックホルムで研究ポストを求めているといううわさを耳にしたアフセーリウスが、それならばストックホルムに来てはどうかと誘った事実を指すのであろう。これに対して、ラスクは、魅力を感じながらも、諸般の事情で今はコペンハーゲンを離れるわけには行かないという気持ちを表わしたものである。しかし、アフセーリウスの誘いは、ラスクの心境に確かな変化をもたらした。コペンハーゲンの閉塞感からの脱出を考えたのである。しかし、それには大義名分が必要であった。そこで、ラスクが思いついたのが懸賞論文の検証旅行という構想であった。懸賞論文で扱った言語比較の研究をさらに発展させ、ノルド語さらにはヨーロッパの諸言語の起源をたどるために、ロシア南部のカフカス地方やそれに隣接するアジアへの研究旅行を願い出ることにしたのである。ラスクがカフカスおよびアジアを目指したのは根拠があった。当時のラスクは、北欧人たちの故郷はその辺りにあり、そこから北へ

向かって、現在の北欧の地に定住したと考えていたからであり、言語的にも、北へ向かうときに、ノルド語はトラキア語（＝ギリシャ語派・イタリック語派）から分かれたと推測していたからである。

研究旅行に出かけるためには費用が必要となる。ラスクは、庇護者であるビュロウをフューン島に訪ね、計画を打ち明けたのである。すると、ビュロウは、この計画に大いに賛同し、2,000 リースダーラの援助を申し出てくれた。ラスクの筆頭司書補の年収の10倍に当たる額である。これによって、あとはコペンハーゲン大学の監督機関である王立委員会に、休暇とポスト保全の願いを出すだけとなった。

ラスクがフューン島からコペンハーゲンに戻ると、アフセーリウスからの手紙が来ていた。その手紙に対する1816年7月9日付のラスクの返事が残っている：「フューン島旅行から戻ったら、君の温かい手紙が来ていて、本当に心地よい驚きでした。君にはほとんどお見通しのようなですね。私自身の家族のことに決着をつけたので、すぐに弟に会いに行きます。明日、旅行許可の申請を提出するつもりです。私の給料はほんのわずかで、個人財産もまったくありませんから、実のところまったくの文無しです。それに、前回のスウェーデン旅行ではもらったのですが、公的な援助は願い出ません。それなのに、はるばるペテルブルグまで、そしてそこからドン川とカフカスまでの来年の旅行が可能になったのです。というのは、フューン島の個人の篤志家が支援を約束してくれたからなのです。それではっきりとこの旅行の決心がついたのです」。この文面からは、ビュロウのおかげで旅行資金のめどがつき、あとは当局に旅行許可をもらうだけになったラスクの弾むような気持ちが伝わってくる。また、家族のことも解決したので弟に会いに行くという箇所は、もしラスクが長期間国外の研究・調査旅行に出かける場合は、オーゼンセ大聖堂学校以来の友人、ペーターセンがハンス・クリスチャンのめんどろをみってくれることになったことを指している。ペーターセンも、卒業資格をとらないまま

あったが、ニュロップの世話で、個人教師としてフューン島に戻り、さらに1815年からは当地の神学校の教壇に立ち、翌年結婚もしていた。彼がハンス・クリスチアンの世話と教育に責任をもってくれることになったのである。ペーターセンもコペンハーゲン大学のノルド語教授になるまでにはしばらく時間がかかる。フューン島から再びコペンハーゲンに出て、大学図書館の司書補、司書、称号教授を経て、教授になったのは、ラスクの死後、1845年のことであつた。

このような手紙をスウェーデンの友人アフセーリウスに書いた同じ日付で、ラスクは王立委員会に対して、以下のような申請書を提出した：「私は、昨年アイスランドへの学術旅行から帰国してすぐに、大学・ラテン語学校王立委員会に旅行の結果に関する臣下としての報告書を提出いたしました。さらには、私はその自由を十分に活用して、将来の希望とその希望を実現したいと思う基盤を築き上げました。さて、今のところ新しい仕事や義務に妨げられることもありませんので、私は、ドン川とカフカス近辺の、私たちの祖先の古代の源郷へ旅行をするためのかなりの支援の申し出を、個人の篤志家から受けております。また同時に、多くの必要な準備をして、道筋をつけねばなりませんが、ストックホルムの友人からのありがたい誘いも受けております。そこで、王立委員会におかれましては、大学の図書館の筆頭司書補としての私のポストと、それに付随する将来の変革の際の見込みを失わないまま、2、3年間これらの幸運な機会を利用することを、ご許可いただけますよう、お願い申し上げます」。

ラスクは、ビュロウの支援とアフセーリウスの招きを理由に、東方への旅行の申請をしたのである。かなり唐突で強引な申請書の内容だが、常に直線的に突き進むラスクの行き方が表われた文章でもある。見方によっては、ずいぶん虫のいい、自分勝手な申請内容である。とくに、留守中のポストの保全の希望は理解できるが、「将来の変革の際の見込み」とは、ちょうどスウェーデン・ノルウェー旅行から帰国

したと際に、大学図書館のボランティアから主事補に格上げされたように、および、アイスランド旅行から帰国した際に、司書補から筆頭司書補に昇格したように、人事に移動があった場合の昇格の可能性が念頭にあったと思われる。帰国したら、司書あるいはそれ以上の研究ポストに昇格することを期待していたのであろうか。なお、コペンハーゲン大学図書館の司書は、単なる書籍の管理者というより、研究者であることを付記しておきたい。大学のポストに数の制限があるため、大学図書館の司書の身分で業績を積み、大学に迎え入れられる機会を待つというシステムである。ラスクも、モルベックも、そしてペーターセンもこの過程を経ている。

申請書の前半は、かなり直接的とはいえ、へりくだって海外研究の許可を求める気持ちが表わされているが、申請書の後半は大きく調子が異なる：「さらに、以前の旅行に劣らず困難な、現在企画中の長旅に出発する前に、1812年から1815年にかけてのスウェーデン、ノルウェー、アイスランド旅行に関して、および、早くもラテン語学校から、もうじき終わる29歳までほとんど一途に身を捧げてきた古ノルド語の研究に関して、私は祖国で希望をもてるのかどうかを、お知らせいただければ大変うれしく存じます」。この部分は、全身全霊を傾けて研究し、成果をあげてきたにもかかわらず、学問的に正当に評価されない不満（この時点では、最優秀賞を受賞したにもかかわらず、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』は出版のめどさえついていなかった）、および、そのことに連動する安定した学術的なポストにつけない不満を、王立委員会に対して、じかにぶつけた内容になっている。申請書の前半で願い出た海外旅行と関連させながら、祖国デンマークが、研究ポストを用意してくれないのならば、いつでも国外でポストを得ることになるぞという開き直りともとられかねない、恐喝めいた調子さえ感じられる、危うい内容でもある。

王立委員会からの返事はなかなか来なかった。ラスクには焦燥の

日々が続いた。ラスクはもうほとんどあきらめかけていた。すると、ちょうど3ヵ月後に、王の許可が下りたという王立委員会からの知らせが届いたのである。このときの喜びは、1816年10月16日付の 아우セーリウス宛の手紙に率直に表われている：「私は絶望からは解放されましたが、起ってくるさまざまな些事が、出発の妨げになるのではないかと、まだ少し心配しています。でも、すぐにでも友を抱きしめる喜びを味わいたいと願っています。君の親切のおかげで最初にこの旅行を思いついたし、旅行を実行する可能性が開けたのですから」。ただし、この王立委員会の返事では、申請書の後半に書かれた祖国での将来の可能性については、触れられないままであった。ラスクは、この王立委員会の黙殺については、旅先のストックホルムからミュラー宛の私信で、失望感をあらわにしている。1817年5月29日付のその手紙には、「先生は、私の先年の旅行や長年の研究に関して祖国で期待できるものがあるのかという明快な質問を付け加えたこの前の申請書のことをご存知ですね。しかも、それに対して、書面でも口頭でも、一言の返事もないこともご存知ですね！」とあり、関係者が、ラスクの功績と将来性を、積極的に認めようとしないことに対する不満を述べている。

それでも、ラスクには、閉塞感からの開放は、ありがたかった。まずは慣れ親しんだストックホルムに向かって、コペンハーゲンを出発した。前回のスウェーデン旅行は、コペンハーゲンから陸路を北上し、フーン島北部のヘルシンゲアから船で対岸のスウェーデンのヘルシンボリに行き、そこから陸路を用いたが、今回はコペンハーゲンを船で南下し、スウェーデン南部を海路で迂回するコースを選んだ。前回は、ヘルシンボリに着いてからストックホルムまで横断する行程の天候が厳しく、ストックホルムに着いた後、数日間寝込んだ記憶が、ラスクに南回りの船旅を選ばせたのであろう。それは、1816年の秋

のことであった。同年10月25日付の日記は「帆船ソフィア・マグダレーネ号に乗船した」で始まる。筆跡が判読できない部分が多いため、ここでは内容の詳細は披露できないが、残っているラスクの日記の最も古い日付である。あるいは、日記帳の始まり方から推測すると、ラスクが日記をつけ始めたのは、このときが最初だったのかもしれない。2～3年のつもりで出かけた研究・調査旅行であったが、再びコペンハーゲンの地を踏んだのは1923年5月5日であった。このとき、ラスクは予想だにできなかった6年半の長旅に出発したことになる。

スウェーデンに向かう船旅についての日記の情報を、イェルムスレウ・ビエロム編のラスクの書簡集の注釈とキャステン・ラスクによる『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』から集約すると、船長は最初の停泊地カルマルの出身であった。出帆しようとしたが、逆風のため10日間碇を下ろして天候の回復を待った。ラスクは船内をいらいらしながら歩き回った。碇を上げたのは11月4日だったが、デンマークのフーン島南方のメン島とスウェーデンの南方のボルンホルム島の間を通過するときも逆風が吹き、スウェーデンに入っても、南部の都市カールシュクローナと東方のエーランドとの間も荒れ模様であった。ラスクは、船旅には弱く気分が優れなかったが、少しはスウェーデン語の本を読んだ。ラスクは、カルマルでは、スコットランドのリースで得た知人の家で、11月8日から10日まで歓待され、代わりにフィンランド語を教えた。11月12日には、ストックホルムから30キロメートルの地点で、パスポートとビザのトラブルで一時足止めされたが、結局無事ストックホルムに到着した。

以上が、ラスクの書簡集の注釈と『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』から得られた情報だが、デンマークの首都コペンハーゲンと隣国スウェーデンの首都ストックホルムにいたる行程で、2週間以上かかったことになる。これが天候と自然に左右される当時の交通事情であるが、ラスクの旅行のほとんどにはなんらかの不運が伴

う。これらの不運が、ラスクに与えたストレスによって精神が受けたダメージは、ラスクの人生を語る上で無視できない。これもまたラスクの宿命であったといえようか。

ラスクは、求めに応じて、友人アフセーリウスの家にも同居した。スウェーデンでは、最初からアイスランド語の専門家として遇され、ストックホルムに近いウプサラ大学で、アイスランド語の授業を委嘱された。デンマークは、長い間、アイスランドを支配下に置いていたので、エッダやサガ等のアイスランド文学の写本も、コペンハーゲンに保存されていた。しかし、劣勢な国の文化は優勢な国によって軽視されたり、その価値が認識されないことが多い。デンマークも宝物を抱えながら、正當に評価できない時代が長く続いていたのである。それに対して、スウェーデンの学界は、研究の始まりは遅かったものの、デンマークの学界よりも、ずっと早くアイスランド語・アイスランド文学の重要さに気づいていた。デンマークにある写本とは別の写本も保存されていた。ラスクが、最初にスウェーデンに行ったとき、短期間だが、ウプサラ大学に保存されている『スノリのエッダ』の写本の研究をしたことはすでに述べたとおりである。アイスランド文学の研究が進んでいたからこそ、スウェーデンは、デンマークでの評価が定まる前から、ラスクのアイスランド語の学識に敬意を払ってきたのである。ラスクもそれに応えて、サガのスウェーデン語訳の出版に協力を惜しなかった。それによって、スウェーデンでのラスクの評価がさらに高まったことはいうまでもない。なお、ストックホルム大学(Stockholms universitet)の設立は1878年のことで、スウェーデン最古の大学、ウプサラ大学は、当時としてはストックホルム郊外ともいえるウプサラにある。その創立は1477年で、1479年創立のコペンハーゲン大学より2年古い。ウプサラ大学は、1666年創立のルンド大学(Lunds universitet)とともに、早くからスウェーデンの学術の中心であった

し、現在もそうである。

また、ラスクは、アフセーリウスの自宅ではいっしょにアイスランド語を読み、個人的には、地の利を利用して、スウェーデン語やロシア語さらにはペルシャ語の研究にも精を出した。ラスクにとっては、居心地のいい環境で、ビュロウの支援を受けて経済的な憂いなしに、自由に好きな研究をし、アイスランド語の講義に情熱を捧げることができた。そのような安定した環境での自由な研究こそが、ラスクが待ち望んだものであった。そこには、祖国デンマークのコペンハーゲン大学という第一条件が欠落していたのだが...

ストックホルムでの喜びはそれだけではなかった。コペンハーゲンでは、待っても待っても埒が明かなかった、すでに書いていた文法の公刊が実現したのである。まず 1817 年に『アングロ・サクソン語文法』が上梓された。この文法は、後にイエスベルセンが、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』の出版 100 年周年を記念したラスク伝で、「このテーマでの最初の完全に学問的な論考」(p.62)、あるいは、ラスクの没後 100 年の、デンマークの代表的な新聞、ポリティケン紙の特別記事で「画期的なアングロ・サクソン語文法」と呼んだ、それまでイギリスにも存在しなかった本格的なアングロ・サクソン語 (= 古英語) の文法であった。また、古英語辞典 (*Anglo-Saxon Dictionary*, 1882-98) の編者であり、イギリス人が書いた最初の古英語文法、『初歩アングロ・サクソン語文法』(*Elements of Anglo-Saxon Grammar*, 1823) の著者、J. ボズワース (J. Bosworth) (1789 - 1876) も、その文法の序文で、ラスクの『アングロ・サクソン語文法』を、それ以前のラテン語文法の形式に従った文法とは異なり、「独創的で有益な著書」とであると評している (p.xxx)。なお、ラスクは、タイトルページに続く献辞を、今回の研究旅行の経済的支援者であり、長年のラスクの庇護者であるヨハン・ビュロウに捧げている。

この文法は、1930 年に、ラスク自身によって改訂・増補され、イ

ギリスの古代史家・神話学者の B. ソープ (B.Thorp) (1782-1870) によって *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue* として英訳された。ソープは、1826 年にコペンハーゲン大学に考古学の研究のために出向いたが、ラスクに傾倒し、英訳を手がけたのである。この英訳は、イギリスの英語学者・音声学 H. スウィート (H.Sweet) (1845-1912) の、後に古英語の文法の定番となった *An Anglo-Saxon Primer* (1882) が出るまでの半世紀、英語研究者に広く用いられた。要するに、この 1817 年のラスクの古英語文法は、英語の歴史的な研究の基礎を築いた画期的な著作であった。同時に、この古英語文法は、以後のラスクの文法記述の方法論を最終的に確立したという点でも、注目に値する。ラスクの文法記述は、1811 年のアイスランド語文法が基本となっているが、これにはいくつかの修正が必要であった。修正の結果、確立した文法書の形式で初めて発表したのがこの古英語文法である。以後のラスクの諸言語の文法は、この形式に従うことになる。

この『アングロ・サクソン語文法』が、1811 年の『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』と、文法の記述方法で、最も大きく違う点は、(1) 格変化を示す際の配列を、主格、属格、与格、対格から、主格、対格、与格、属格に修正したこと、(2) 3つの文法的な性のうち中性を最初に置く記述方法を徹底させたこと、(3) ゲルマン語に特有の強変化動詞の分類が修正され、現在の分類に大きく近づいたことである。第 1 番目の、主格、対格、与格、属格の並べ方への修正の事実だけは、すでに『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』のところでも触れたが、『アングロ・サクソン語文法』では、ラスクはその理由については述べていない。1830 年のソープによる英訳では、この点が序文の最後で、ラテン語の 3 人称の人称代名詞の単数(「それ、彼、彼女」)を例にとって、詳しく語られている(pp.LIV-LV)。説明を明確にするために、ラスクが示した変化表をそのまま引用する：

Neut. Masc. Fem.

N.	id	is	ea
Acc.	id	eum	eam
Abl.	eo		eā
D.	ei		ei
G.	ejus		ejus

対格を主格から離すべきではないという理由として、対格 (id) は中性では主格 (id) と同形であるし、女性の対格 (eam) は明らかに主格 (ea) から派生していること、与格を属格の前に置く理由として、属格 ejus は明らかに与格 ei から派生したことを挙げている。第2番目の、中性を3つの性のうち最初に置くべき理由としては、語形が最も単純で、とくに中性では、主格と対格が常に同形であること、さらには、中性が最も古い要素を含んでいるようだという見解を述べている。グリムの指摘にもかかわらず、ラスクが中性・男性・女性の配列に最後までこだわったことは、すでに述べたとおりである。

ビエロムの『デンマーク語に関するラスムス・ラスクの論文』(1959)によると、ラスクは、1811年5月27日付の、ラテン語学校時代の恩師でギリシャ語・ラテン語を習ったブロック宛の手紙で、とくにギリシャ語の研究をとおして、「語尾に示されている自然な概念的配列」と「語尾の形の互いに自然な配列あるいは互いの派生」に基づく主格、対格、与格、属格の配列の妥当性について述べている。ラスクは、ギリシャ語では、中性は単数・複数とも同形、両数では主格・呼格・対格は同形で、与格・属格も同形であることから、この配列が、形式上合理的だと考えたのだという (p.45)。それは、1811年の『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』が出版されたちょうど同じころであったが、伝統的な配列の修正は、出版に間に合わなかったことになる。この件に関連して、イエスベルセンは、学位論文『英語の格の研究』の中で、形式と統語上の理由から「ドイツではまだ一般的な、対格を自然な位置から移動させて属格の後に置く格の順序よりも、主格、対

格、与格、属格という我々のもと（＝デンマーク）ではラスク以来通例となっている順序の方を好むこと」(p.104)を明言している。なお、サンスクリット語に今も残っている印欧祖語がもっていたと考えられている8つの格は、ギリシャ語同様、両数において融合が著しいが、[主格・呼格・対格]、[具格・与格・奪格]、[属格・位格]がそれぞれ同形で、ギリシャ語・ラテン語の場合と同様に、ラスクが考えた配列は、格の融合という歴史的観点からも正しいといえる。

ゲルマン語の強変化動詞については、現在では、以下のように分類される。なお、強変化動詞の分類は、不定詞、直説法の過去・単数および過去・複数、過去分詞の4つの語幹母音の交替のタイプに基づいてなされる。現在の英語の drink-drank-drunk の過去形 drank は、元々は過去・単数形で、過去・複数形には母音の異なる別の形が存在していたのである。また、母音の上のアクセント記号は、その母音が長母音であることを表わしている。それぞれ1例を示せば以下になる。用例の下には交替する母音を示している。なお、古ノルド語の過去形の用例としては1人称の単数形と複数形を示す。

第1類 例:古ノルド語 *ríða*、古英語 *rídan* (>現代英語 ride「乗る」)

古ノルド語	<i>ríða</i>	<i>reið</i>	<i>riðum</i>	<i>riðinn</i>
	í	ei	i	i
古英語	<i>rídan</i>	<i>rád</i>	<i>ridon</i>	<i>riden</i>
	í	á	i	i

第2類 例:古ノルド語 *fljúga*、古英語 *fléogan* (>現代英語 fly「飛ぶ」)

古ノルド語	<i>fljúga</i>	<i>flaug</i>	<i>flugum</i>	<i>floginn</i>
	iú	au	u	o
古英語	<i>fléogan</i>	<i>fléah</i>	<i>flugon</i>	<i>flogen</i>
	éo	éa	u	o

第3類 例：古ノルド語 *drekka*、古英語 *drincan*(>現代英語 *drink* 「飲む」)

古ノルド語	<i>drekka</i>	<i>drakk</i>	<i>drukkum</i>	<i>drukkin</i>
	e	a	u	u
古英語	<i>drincan</i>	<i>dranc</i>	<i>druncon</i>	<i>druncen</i>
	i	a	u	u

第4類 例：古ノルド語 *bera*、古英語 *beran*(>現代英語 *bear* 「運ぶ」)

古ノルド語	<i>bera</i>	<i>bar</i>	<i>bárum</i>	<i>borinn</i>
	e	a	á	o
古英語	<i>beran</i>	<i>bær</i>	<i>bæron</i>	<i>boren</i>
	e	æ	æ	o

第5類 例：古ノルド語 *gefa*、古英語 *giefan* (>現代英語 *give* 「与える」)

古ノルド語	<i>gefa</i>	<i>gaf</i>	<i>gáfum</i>	<i>gefinn</i>
	e	a	á	e
古英語	<i>giefan</i>	<i>geaf</i>	<i>géafon</i>	<i>giefen</i>
	ie	ea	éa	ie

第6類 例：古ノルド語 *fara*、古英語 *faran*(>現代英語 *fare* 「[古語] 行く」)

古ノルド語	<i>fara</i>	<i>fór</i>	<i>fórum</i>	<i>farinn</i>
	a	ó	ó	a
古英語	<i>faran</i>	<i>fór</i>	<i>fóron</i>	<i>faren</i>
	a	ó	ó	a

第7類 例:古ノルド語 falla、古英語 feallan (>現代英語 fall「落ちる」)

古ノルド語	falla	féll	féllum	fallinn
	a	é	é	a
古英語	feallan	féol	féollon	feallen
	ea	éo	éo	ea

上に示した例は、典型的なもので、多くのヴァリエーションが存在する。しかし、ゲルマン語の中で、古ノルド語(=アイスランド語)と古英語の語幹母音の交替の規則性は明らかである。古ノルド語の ei は古英語の á と、古ノルド語の au は古英語の éa と、規則的に対応していることを考慮に入れると、母音交替の規則性はさらに明確となる。ラスクは、第1類～第7類の分類の順番は異なるが、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』では、これを、第3類、第4類、第5類をひとつにまとめて、5つに分類していた。『アングロ・サクソン語文法』では、これを修正して、第4類と第5類をひとつにまとめて、6つに分類している。第4類と第5類の基本的な違いは、過去分詞の語幹母音だけである。この2つを峻別せず、ひとつに括ることは、誤りというより分類の細かさの問題である。したがって、ラスクは、『アングロ・サクソン語文法』の時点で、強変化動詞の正しい分類に行き着いていたといえる。ラスクは、この方式を、翌年のスウェーデン語によるアイスランド語文法にも適用しているが、後のフリジア語文法とソープ訳の古英語文法では、第4類と第5類は、依然として区別しないままだが、若干のあいまいさが残っていた第7類を正しく整理し、現在の古英語文法とくらべても遜色のないものにした。

『アングロ・サクソン語文法』が、ラスクの最初の文法記述の確立した形式とすれば、同じ原理の下に、第2番目に公刊されたのが、『アイスランド語あるいは古ノルド語入門』の改訂版・スウェーデン語訳『アイスランド語あるいは古ノルド語概説』であった。1818年の刊行

で、献辞は親友 A.A. アフセーリウスに捧げられていて、その下には「このたび私が当地に来る気になったのは、ノルド語の古い写本に対するあなたの情熱とあなたの友情に篤い、親切な招待のおかげでした。それなしには、私のアイスランド語文法のスウェーデン語訳の改訂版はけっして刊行されなかったでしょう。」という率直な謝辞が述べられている。アフセーリウスの誘いによって、コペンハーゲン脱出を決意し、最初の滞在地として選んだストックホルムで、アフセーリウスの尽力によって、コペンハーゲンでは出版できなかった著書が、立て続けに出版された。ラスクのアフセーリウスに対する感謝の気持ちは、この謝辞によく表われている。

『アングロ・サクソン語文法』と『アイスランド語あるいは古ノルド語概説』が刊行される前に、ミュラーとの間に以下のような手紙のやり取りがあった。ミュラーは、1816年12月28日付の手紙で、懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』を出版するために、影響力のある物理学者エーアステズと話をして協力を約束させる等、いろいろ努力をしていることを述べた後で、「確かにあなたはコペンハーゲンではまだほとんど報われていませんが、信じていたきたいのは、あなたの価値は評価されていますし、あなたの大学への採用が遅れているのは、何事にもろい大学組織の運営のために過ぎないということです。」と、コペンハーゲンに失望し、外国に活路を見出そうとしているラスクの気持ちを慰めている。

手紙の最後には、「あなたのオッターとウルフステンの旅の労作は、きっとこの手紙と同時に手元に届くでしょう。それはあなたの学問的名声を広めるのに役立つでしょうし、その名声も、ストックホルムでの無事出版を願っている、アングロ・サクソン語文法が出たときには、さらに高くなるでしょう。そして、ロシアでは、あなたのノルド語の起源の研究がきっとあなたを待っているでしょう。」と、祖国

デンマークで報われない、失意のラスクを励ますことばが書かれている。なお、「オッターとウルフステンの旅」とは、9世紀のイングランド王アルフレッドのころの古英語で書かれた、オッターとウルフステンそれぞれが、スカンディナヴィア半島を西岸沿いに北上したときの話とバルト海を航海したときの話である。オッターは、古英語では、Ohthere [オーホトヘレ] と呼ばれるノルウェーの商人、ウルフステンは Wulfstan [ウルヴスタン] と呼ばれるユトランド出身と思われる商人のことである。ラスクの『オッターとウルフステンの短い旅行譚』は、元々 1815 年 1 月のスカンディナヴィア文学協会で講演したものであったが、デンマーク語訳と注をつけて刊行が予定されていた。1815 年には脱稿していたが、翌年やっと出版されたのである。また、「ストックホルムでの無事出版を願っている。」という箇所は、ラスクの古英語文法が刊行にこぎつけそうな状況への祝辞、「ロシアでは、あなたのノルド語の起源の研究がきっと待っているでしょう。」という箇所は、スウェーデンの後はロシアに向かう予定のラスクの行程を念頭に置いて、ロシア滞在中に懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』が出版されるように尽力するという、ミュラーの強いメッセージが込められている。ラスクが、懸賞論文の公刊を知ったのは、ロシアではなくスウェーデンだったのは、その居心地のよさと報われない期待のために、思いもかけずストックホルムに長滞在した結果であった。

このミュラーの手紙に対する、ラスクの 1817 年 2 月 7 日付の返信は、「12 月 28 日の先生のお手紙に心より感謝いたします。私を以前から庇護してくださる方々に忘れられていたわけではないということ知って本当にうれしく思います。コペンハーゲンからストックホルムへの直通郵便が 2 度ありましたが、知人からはまったく便りがなかったので、忘れられていると思っておりました。また、私のことに関しまして、エーアステズらと話していただいた先生のお骨折りにも大変感謝いた

しております。」という感謝の気持ちと自分が忘れられた存在ではないということを知った安堵感がつづられている。また、同時に12月28日付のミュラーの手紙をラスクが受け取ったのは1月に入ってからだろうが、2月7日までにコペンハーゲンからストックホルムに直接届く郵便が2度しかない当時の通信事情は、ラスクの孤独感を増幅させていた。

ラスクの宿敵、モルベックからも微妙な内容の便りがあった。1817年3月24日付の手紙である。ラスクが、ストックホルムで『古エッダ』や吟唱詩の刊行に協力していることに関して、モルベックは、そのような試みは北欧神話の研究を広めるのに非常に役に立つだろうと表面的には認めつつも、昔からアイスランド文学はデンマークと密接に関係があるのだから、そのような出版は、17世紀から研究を始めたスウェーデンではなく、デンマークでなされるべきではないかというのが、その趣旨であった。

これに対するラスクの返信が残っている。それは、4月21日付の手紙で、「私ほどコペンハーゲンでそれが出版されることを望んだ者はいません。しかし、私は一度確かに出版できそうだと思っていたのに裏切られたことがあります。それ以来、印刷所を見つけることはできませんでした。それで、どこでも出ないよりもストックホルムで出る方がいいと思ったのです。」と、なぜ、スウェーデン人に協力して、ストックホルムでエッダの出版をするのかという理由を説明している。ラスクがいったかったのは、祖国がアイスランド文学の価値を認めないから、さらに一歩踏み込んでいえば、自分を正当に評価し、処遇しないから、その価値が分かるスウェーデンで、エッダの出版するのは仕方がないということであつたろう。モルベックの非難めいた文言は、明らかに狭量とねたみからくるものだが、ラスクの身近な庇護者や支援者たちからの風当たりも強くなっていく。ラスクが、敵国で、活躍すればするほど、ラスクの名声が上がれば上がるほど、祖国

での疑心暗鬼が募り、うわさが一人歩きするようになっていったのである。

イエラムスレウとビエロム編のラスクの手紙集に収録されているものだけで見ると、ストックホルムでの最初の手紙は、ラスクが出した1817年2月7日付のもの、最後の手紙は、フィンランドへ出発する直前の1818年2月21日付のミュラーからのものである。ストックホルム滞在は1年と3ヶ月だが、ラスクは実に多くの人たちと手紙のやり取りをしている。その中でも、ラスクの経済的な支援者であるフーン島の荘園主ビュロウ、学問的な庇護者である神学教授ミュラー、大学図書館司書・特任教授ニュロップとの間の書簡の多さが目を引く。その内容は、主として、ラスクの著書や業績に関するもの、ラスクの処遇に関するもの、祖国への恩義や貢献に関するものである。

ビュロウも心配していた。1817年12月29日付の手紙で、「おそらく、考えの浅いねたま心をもった者がでっち上げ、広めたものですが、あなたがスウェーデンにとどまり、もう祖国には戻ってこないだろうといううわさがあります。私はその不快なうわさに非常に憤慨して、あなたの善良な考え方、利己心のなさ、愛国心について、私が持っている正直な思いに基づいた、いくつもの正当な根拠を出して否定してきました。」といいながらも、ラスクに、祖国と友人の恩を忘れてはいけない、スウェーデンで研究ポストと安定した収入で誘われていることを指して、「卑しい利益」に惑わされてはいけないと諭している。

ミュラーのかつての教え子に対する文面は厳しかった。1817年5月6日付の手紙にはつぎのようにつづられている：「あなたはスウェーデンで見出したアイスランド語への興味について述べ、この分野でひとりのアイスランド人がスウェーデン人の試みの先頭に立てば、スウェーデン人はすぐにデンマーク人の試みを凌ぐだろうといたいのです。このアイスランド人があなたのことではないと信じたいと思います。ストックホルムに滞在して、あなたが講義をしたり、スウェー

デンの学者にあなたの学問を伝えることは自然なことです。しかし、あなたがスウェーデンにとどまることに決めるようなことがあれば、私は、あなたには愛国心が欠如している、まさにあなたの同胞に対しての義務を破棄してしまった、あなたに関するかぎり、祖国への忠義の裏切り者になったとみなします。私に関しても、晩年になってアイスランド文学に取り組むようになった主な理由のひとつは、アイスランド文学の流れに、私たちに固有の何か、デンマーク人の試みが他の国民を凌ぐ何かを認めたことです。私は我が国の国家的名誉のために、ささやかでも精一杯貢献したいと思ったのです。あなたは、祖国はあなたに何もしてくれなかったと、いうかもしれません。関係者はあなたのためにもっと多くのことをすべきであったことは、私は否定しません。しかし、私は問いたい。どのようにして、フーン島出身の農民の子は、ストックホルムで講義をし、学界でその名前が知られるようになったのでしょうか。それは、祖国の人々があなたの無力だった幼年時代や少年時代にあなたを支援し、祖国の制度があなたの研究を続けるための援助を与え、祖国の王がアイスランドへ旅行させてくれたからではないのでしょうか。ですから、私たち各人はすべてを祖国に負っているといえるのです」。

神学者としての顔とは別に、ミュラーは北欧の古い文学やデンマーク語辞書の編纂にも関与し、『サガ・ライブラリー』全三巻(*Sagabibliotek* 3 Bind, 1817-20)を出版する等、言語や文学にも造詣が深かった。そのような背景があったからこそ、神学を捨て、言語学にのめり込んでいくラスクに理解を示し、支援してきた。「裏切り者」という激しいことばは、祖国での冷遇ゆえに祖国を捨て、敵国スウェーデンに活路を見出そうとするラスクへの怒りの表現であった。そして、「私たち各人はすべてを祖国に負っている」という最後の文章は、ラスクの墓碑銘に生かされることになるのだが、そのことについては後述する。

このミュラーの辛辣な手紙に対する、ラスクの1817年5月29日付の返信が残っている。その中でのラスクの反論はつぎのとおりである：「私自身のことに關しては、ふたつのまったく違う方面から、今のところは私的な提案があります。ひとつはストックホルムに残ることについて、もうひとつはウプサラに残ることについてです。どちらも年俸はおおよそ1,500～2,000 スウェーデン・リースダーラです。しかし、私はこれが何らかの〔正式な〕申し出になることを慎重に避けていますし、〔アイスランド語の〕文法的・分析的授業を披瀝して欲しいという私の支援者たちからの要望に反して、いろいろな点で私の講義を控えてきました。というのは、もし私が、証券取引所で、公にスウェーデン語で、アイスランドの歴史・自然・文学等について講義をもてば、悪く解釈されると思ったからです。（中略）正直なところ、最初は自分の考えをすっかり隠して、申し出がなされるままにしておこうと思いました。コペンハーゲンでその申し出を有利に活用するためでしたが、すぐにそれは卑しいことだと思いました。ですから、このことに關しては、祖国に対する裏切り者という称号は受けられません。しかし、デンマーク人が外国で本を出すことが裏切りであったり、デンマークの名誉を曇らせるのなら、私の罪は大きく、非常に重いですし、おそらくこれからもっと大きくなるでしょう。でも、『アラディン』をアムステルダムで出版したのですから、エーレンスレイヤーもまた裏切り者ということになります」。

海外に単身留学して、自分に対する母国の誤った情報やうわさが伝わってくるのはつらいものである。とくに、通信手段が乏しく、不便だった当時の北欧という状況を考えると、ラスクが、かざられた情報の中で、祖国への忠義と外国での飛躍の可能性の板ばさみになって、ひとりで悩み、苦しんだことは想像に難くない。師であり、支援を受けているミュラーの誤解はどうしても解いておきたかったはずである。裏切り者という汚名は甘受できない、もし自分が裏切り者なら、

文壇の寵児、エーレンスレイヤーもまた裏切り者であるという切り口上で抗弁する論法は、決して品格のあるものではないが、なりふり構わないラスクの悲しみとやるせなさが表われている。また、「農民の子」と呼ばれたことについて、同じ手紙の中で自分のことを「百姓」と卑下した呼び方をし、その単語にわざわざ注を付け、「ところで、私の父は元々農民ではありませんが、同じように、田舎に住んでいましたから、父も私の家系全体も小百姓でした。でも、私は父のことを恥じてはいません。」と抗弁し、自分の出自を蔑まれたことに対するあらわな感情を表出させている。なお、証券取引所での講義は、友人のアフセーリウスが提案したものであった。最初は講義はデンマーク語で行うつもりだったが、スウェーデンという環境を考慮して、スウェーデン語に変更したと、1817年1月3日のラスクの日記には書かれている。

また、同日の日記には、ミュラーへの反論の手紙と内容が重複し、しかも手紙には書けない本音に触れた記述がある。ただし、ラスクは思いついたことを書きとめ、しばしば日付を後から書き込む習慣があり、実際にこれが書かれたのは、ミュラーの同年5月6日付の手紙以降であると思われる。その記述は以下のとおりである：「アフセーリウスや他の支援者たちは、アイスランド語の写本が保存されているストックホルムの王立図書館で、あるいは、ウプサラ大学の教授として、私をスウェーデンに引き止めたいという話をよくした。私はこれにはあまり答えず、彼らが話すがままにしておいた。しかし、もし彼らが実際にこれを実現するために真剣に動いていたら、私はこの非常に有望で有利な申し出のひとつを、おそらく受けていたであろう。しかし、これが大げさな話となり、このうわさはルンドやコペンハーゲンにまで広がってしまった。コペンハーゲンからは、すでに私を祖国に対する裏切り者とみなしていた、ビュロウとP.E. ミュラー教授との手紙のやり取りの上での、不快な出来事がもたらされた。ちょうどそのこ

ろ、私はお金がなかったので、旅行を続けるために印刷屋の職人になって、職人として旅をすることを考えていた」。うわさになったスウェーデンでの研究ポストに関して、無関心を装いながら魅力を感じていたラスクの真情や、支援者たちに祖国に対する裏切り者と決めつけられ、支援がなくなれば、印刷屋の職人にでもなって旅行を続けざるを得ない、ラスクの弱い立場を読み取ることができる。

ニュロップからの手紙は常に好意的である。ストックホルムにいるラスクに代わって、懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』の校正を担当したのは、ニュロップとアイスランド人で古アイスランド文学研究家のフィンヌル・マグヌースソン (Finnur Magnússon) (1781-1847) であったが、ニュロップの手紙は、校正の進捗状況や本の体裁、コペンハーゲンの学界の様子等を知らせたものである。例えば、1817年6月12日付の手紙では、「あなたの価値の高い懸賞論文が、ついに印刷されるようになったことを、ことばでは表わせないほど喜んでいます。」と、執筆後3年もたってようやく出版されることになった懸賞論のこと、校正はマグヌースソンと自分が担当することになったことを報告している。1817年8月7日付の手紙では、「あなたの懸賞論文はかなり進んでいます。マグヌースソンによれば、都合のよい船便があったので、あなたに校正刷りを送ったそうです。」と中間報告をし、1817年11月1日付の手紙では「あなたの著書の進捗が遅いことを不快に思う気持ちは理解できます。」と、学問的には大先輩でありながらラスクのためにめんどろな校正を引き受けている寛容さで、なかなか進まない出版作業に不満を募らせているラスクを慰め、タイトルページ、国王への献辞、謝辞は、それぞれ1ページ置きにし、前書きはイタリック体にして欲しい等の注文をつけるラスクに対し、1817年12月11日付の手紙では、タイトル、献辞、前書きもちゃんと印刷されていること、1818年1月29日付の手紙では、完成した懸賞論文と古英語文法を、明日ビュロウ宛に送ら

せることを、親切に知らせている。

懸賞論文の印刷に時間がかかったことは、外国にいるラスクには焦燥の種でもあった。そのような折、獄官運動のライバル、モルベックからの私信が届く。日付は1817年8月28日、つぎのような一節がある：「あなたのアイスランド語の起源に関する懸賞論文が印刷に入ったことを喜んでいますが、しかし、印刷はあまり速くは進まないでしょう。というのは、印刷所はどこも宗教改革の記念式典のための博士論文でかかりっきりだからです」。確かに、ラスクは博士論文を書かないままであった。懸賞論文より、博士論文の方が優先されるような書き方には、モルベック特有の毒がある。祖国に対する裏切り者といううわさを立てられ、気分の落ち込んだ、孤独な外国での生活で、このような品性卑しい手紙を読まれたラスクの心境はいかばかりであったろう。

しかし、1817年12月、ついに懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』は刷了した。ミュラーは1818年1月15日付の手紙で、「あなたの懸賞論文の最後の一枚の印刷が終わるとすぐ、新年を迎える前にどの旅行奨学金が翌年度分として認められるかが決められることを知っていたので、私はそれを王に急いで届けました。私は、そのついでに、ベテルブルグを経てカフカスへのあなたの計画中の旅行とその実行のための費用について、王にお話しました。」と述べ、国王がラスクを教授に任命し、毎年800リースダーラを2年間、旅行奨学金として認めたことを伝えている。ミュラーは、祖国に対する裏切り者と非難しながらも、ラスクのために何がよいのかを考えていた。それは、ラスクをスウェーデンでの誘惑から一刻も早く切り離し、カフカスへ旅立たせることだったのである。こうして、ラスクはスウェーデンを離れざるを得なくなった。イエラムスレウの「これによってラスクは縛られてしまった。」（『ラスム・スラスクとスウェーデン1812-1818』、p.456）という表現は短いが、核心を突いている。

ミュラーの手紙へのラスクの返信は1818年1月23日付のものが残っている。ラスクは、ミュラーの厚意に感謝しながら、サガの出版のために、スウェーデンが高額な年俸でアイスランド人を採用したことへの不満を述べ、『アングロ・サクソン語文法』の献辞をビュロウに捧げたのに、彼からの支援が途絶えていて、上で引用した1817年1月3日の日記にあるとおり、印刷屋の職人として旅行を続けるほかはないという窮状を訴え、「私の教授の地位は肩書きに過ぎず、私の新しい奨学金は一時しのぎの手段だということは十分承知していますが、それでも教授の地位は私にはとても尊く、奨学金はとても重要だと思われまので、今はまず、喜びと目標への熱意と先生への感謝の気持ちのほかの、すべての考えを脇に置き、すべての感情を追い払います。」というきわめて屈折した表現で、うれしさと感謝の念を表わしている。この文面に漂う虚無感は、サガには、普通のアイスランド人より、精通しているのに、そのように処遇されない不満と鬱屈した感情、ビュロウの支援で始まった旅行なのに、送金が途絶えた経済的見通しの暗さからくる不安とやるせなさに起因していた。

ここで断っておきたいことがある。当時のデンマークでは、教授に3種類あったことである。第1は、正教授（ordinær professor）で、大学に置かれているポストを占め、終身雇用で、講義を担当する。第2は、特任教授（ekstraordinær professor）で、臨時に置かれたポストにつき、任期の間だけ講義を担当する。第3は、称号教授（titulær professor）で、文字どおり肩書きだけの教授で、大学にポストはなく、講義も担当しない。正教授は高額の年俸で保証されているが、特任教授は契約で応分の年俸をもらい、称号教授は無給である。まず特任教授か称号教授で採用されて、何年間か業績を積んだ後で正教授に推挙されるという例も多かった。このときラスクが任命されたのは、第3の肩書きだけの無給の教授で、ミュラーの手紙に素直に喜べなかった理由は、ここにもあったのである。

こうして、1818年2月23日、ラスクは、選択と決心しだいでは大きな転機となるかもしれなかったストックホルム滞在に終わりを告げ、東方へ旅立つことになる。1年3ヶ月のスウェーデン滞在中に、ラスクが残した著書・論文等は、上記の『オッターとウルフステンの短い旅行譚』、『アングロ・サクソン語文法』、『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源の研究』、『アイスランド語あるいは古ノルド語概説』のほかに、アフセーリウスとの共編『スノリのエッダ』の稿本と『古エッダ』の稿本、アイスランド語に関する書評論文や書評が4点ある。上記イェルムスレウの「ラスムス・ラスクとスウェーデン 1812-1818」によれば、「病気と不運と陰鬱さで満ちたラスクの人生の中で、彼のストックホルム滞在は、短い明るく恵まれた時期である」(p.456)。

スウェーデンを出ると、フィンランドからロシアに入り、南下してカフカスに向かう計画であった。この旅立ちで注目すべきことは、ラスクは、行く先々での言語の調査や習得ばかりでなく、これまでの研究を続けるために、コペンハーゲンから持参した書籍や辞書類に加えて、ストックホルム滞在中に入手した書籍、辞書、資料を、携えていたという事実である。ラスクの研究・調査旅行は、いわば、私設図書館を携えての移動であった。ストックホルムを出発したとき、その量がどのくらいであったのかは定かではないが、旅の途中で入手する資料がつぎつぎとそれに加わることになり、当然ひとりでは運べない量となっていった。

(この稿続く)

参考文献

- Andersen, H. 1966. *Oldnordisk Grammatik*³, København.
- Andersen, Poul. 1937. "Rasmus Rask", in: *Selskab for Nordisk Filologi. Fra Rask til Wimmer* (København), pp.7 – 33.
- . 1938. *Rasmus Rask: De fynske Bønders Sprog*, København.
- Anderson, Ingvar and Jörgen Weibull. 1988. *Swedish History in Brief*, Stockholm. (潮見憲三郎訳. 1988. 『スウェーデンの歴史』、文眞堂.)
- Antonsen, Elmer H. 1962. "Rasmus Rask and Jacob Grimm: Their Relationship in the Investigation of Germanic Vocalism", *Scandinavian Studies* 34, pp.183 – 94.
- . 1975. *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions*, Tübingen.
- Bandle, Oscar et al. (ed.) 2002. *The Nordic Languages* Vol.1, Berlin/New York.
- . 2005. *The Nordic Languages* Vol.2, Berlin/New York.
- Bang, Jørgen. et al. 1978. *Gyldendals Tibinds Leksikon*, København.
- Bekker-Nielsen, Hans and Ole Widding. 1972. *Arne Magnusson: The Manuscript Collector*. Odense.
- Bjerrum, Marie. 1956. "Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.375 – 81.
- . 1957. "Hvorfor rejste Rask tik Kaukasus og Indien?", *Danske Studier* (September), pp.80 – 100.
- . 1959. *Rasmus Kristian Rasks Afhandlinger om det danske sprog*, København.
- . 1982. "Rask, Rasmus", *Dansk biografisk Leksikon*³ XI, (København), pp.646 – 51.
- Blangstrup, Chr. et al. 1915 – 1930. *Salmonsens Konversations Leksikon*², 26 Bind, København.
- Bosworth, Joseph. 1823. *The Elements of Anglo-Saxon Grammar*, London.
- Braune, Wilhelm.(Neu bearbeitet von E.A.Ebbinghaus) 1973. *Gotische Grammatik*¹⁸, Tübingen.
- Dahlerup, Verner et al. 1919 – 56. *Ordbog over det Danske Sprog*, 28 Bind, København.
- Danstrup, John og Hal Koch et al. 1962 – 66. *Danmarks Historie*, 14 Bind, København.
- Dideriksen, P. 1960. *Rasmus Rask og den grammatiske tradition*, København.

- Christensen, Carl C. 1932. "Rasmus Rask — Hans død, og hvad han efterlod sig", *Danske Studier*, pp.1 – 21.
- Djupedal, Reidar. 1956. "Rasmus Rask og 'Videnskabernes Selskabs Danske Ordbog'", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.383 – 96.
- Dyggve, Holger P.N. 1932. "Tre ikke tidligere trykte breve fra Rasmus Rask", *Danske Studier*, pp.139 – 47.
- . 1933. "Finn Magnusen og Rasks store rejse", *Danske Studier*, pp.17 – 22.
- Flom, George T. 1939. "On the History of Views about the Vowel System of Old Norse", *JEGP* 38, pp.549 – 51.
- Fussing, Hans H. 1932. "Raskinana", *Danske Studier*, pp.148 – 56.
- Gordon, E.V. 1962. *An Introduction to Old Norse*, London.
- Grimm, Jacob. 1812. "Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog af Rasmus Kristian Rask", *Allgemeine Literatur-Zeitung* 31 – 34. (Repr. in : *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991) , pp.65 – 73 ; *Kleinere Schriften* 7 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.515 – 30).
- . 1822. *Deutsche Grammatik* Bd.I2, Göttingen.
- . 1825. "Frisisk Sproglære, udarbejdet efter samme plan som den islandske og angelsaksiske af R.Rask" in: *Göttingische gelehrte Anzeigen* (1826) , pp.81 – 107 (Repr. in: *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991) , pp.361 – 76).
- Haugen, Einar. 1946. *The Scandinavian Languages*, London.
- 橋本淳他. 1999. 『デンマークの歴史』, 創元社.
- 早野勝巳. 1991. 『アンデルセンの時代』, 東海大学出版会.
- Henriksen, Carol. and Johan van der Auwera. 1994. "The Germanic Languages" in: Ekkehard König and Johan van der Auwera (ed.) *The Germanic Languages*, London/New York, pp.1-18.
- . 1996. "Rask, Rasmus Kristian", in: Harro Stammerjohann (ed). *Lexikon Grammaticorum* (Tübingen), pp.774 – 76.
- Hirt, Hermann. 1931. *Handbuch des Urgermanischen* I. Teil, Heidelberg.
- Hjelmlev, Louis. 1932 – 35. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*, 3 Bind, København.
- . 1933. "Rasmus Rask og Sverige 1812 – 1818 belyst ved hans breve

- til A.A. Afzelius", *Nordisk Tidskrift för Vetenskap, Konst och Industri* IX, pp.445 – 56.
- . 1951. "Commentaires sur la vie et l'œuvre de Rask", *Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague*, Vol.XIV, 1973, pp.3 – 16.
- Hjelmlev, Louis og Marie Bjerrum. 1941-68. *Breve fra og til Rasmus Rask*, 3 Bind, København.
- Horstbøll, Henrik *et al.* 1988 – 98. *Danmarks Historie*, 3 Bind, København.
- Heusler, A. 1967. *Altisländisches Elementarbuch* 7.
- Iversen, R. 1973. *Norrøn Grammatikk*, Oslo.
- Jakobsen, Helge Seidelin. 1986. *An Outline History of Denmark*, København. (高藤直樹訳. 1995. 『デンマークの歴史』、ピネバル出版.)
- Jespersen, Otto. 1891. *Studier over engelske kasus, med en indledning: Fremskridt i Sproget*, København.
- . 1918. *Rasmus Rask*, København/Kristiania.
- . 1922. *Language: Its Nature, Development, and Origin*, New York.
- . 1926. *Sprogets Udvikling og Opståen*, København.
- . 1932. "Rasmus Rask", *Politikens Kronik*, 14.11.32.
- . 1938. *En sprogmands levned*, København.
- 秦宏一. 1975. 「ラスムス・ラスク」、月刊『言語』 Vol.4, No.9, pp.78 – 83.
- Jones, William. 1786. "On the Hindu's", in: Lord Teignmouth. *The Works of Sir William Jones* Vol.1(London,1807), pp.19 – 34.
- Jónsson, Finnur. 1894-1901. *Den Oldnorske og Oldislandske Litteraturs Historie*, København.
- . 1900. *Snorri Sturluson:Edda*, København.
- . 1911. *Snorri Sturluson:Heimskringla*, København.
- . 1921. *Norsk-Islandske Kultur- og Sprogforhold*, 3 Bind, København.
- . 1930. *Island:fra Sagatid til Nutid*, København.
- . 1932. *De gamle Eddadigte*, København.
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編). 1988 – 93. 『言語学大辞典：世界言語編』全5巻、三省堂.
- Karlson, Gunnar (English Translation by Anna Yates). 2000. *A Brief History of Iceland*, Reykjavik. (岡沢憲美監訳. 小森宏美訳. 2002. 『アイスランド小史』、早稲田大学出版局.)
- 風間喜代三. 1978. 『言語学の誕生』、岩波書店.

- Kierkegaard, Søren. 1843. *Enten-Eller*, in: K. Hansen. *Søren Kierkegaard: Skrifter i Udvalg* (København, 1965), pp.7 – 73.
- Kufner, Herbert L. 1972. "The Grouping and Separation of the Germanic Languages" in: Frans von Coetsem and Herbert L.Hefner (ed.) *Toward a Grammar of Proto-Germanic*, Tübingen, pp.71 – 97.
- Kuhn, Hans. 1962. *Edda I. Text*, Heidelberg.
- . 1968. *Edda II. Kurzes Wörterbuch*, Heidelberg.
- Kålund, Kr. 1897. "Bidrag til R.Rasks lævned", *Dania* 4, pp.129 – 43.
- Lund, Jøren et al. (ed.). 1994 – 2002. *Den Store Danske Encyklopædi*, 20 Bind med Supplement, København.
- Malone, Kemp. 1952. "Rasmus Rask", in: Thomas.A.Sebeok(ed). *Portraits of Linguistics* Vol.I (Bristol, 2002), pp.195 – 99.
- Mossé, Ferdinand. 1956. *Manuel de la langue gotique*2, Paris.
- Müller, P.E. 1833. "Nekrolog: Professor R. Chr. Rask", *Danske Litteraturtidene*, pp.1 – 31.
- Nielsen, Hans Frede. 1989. *The Germanic languages: Origins and Early Dialectal Interrelations*, Tuscaloosa/London.
- Noreen, Adolf. 1970. *Altnordische Grammatik I*, Tübingen.
- Nygaard, M.1066. *Norrøn Syntax*, Oslo.
- Ny kgl.Samling 389 ek 80 (Rasks dagbog 1818 – 32)*.
- Pedersen, H. 1916. *Et Blik på Sprogvidenskabens Historie*, København.
- . 1924. *Sprogvidenskabens i det nittende Aarhundrede: Metoder og Resultater*, København.
- . 1932. "Indledning", in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger* Bind I (København), pp.XIII – LV.
- Petersen, N.M. 1834. "Bidrag til Rasmus Kristian Rasks levned", *Samlede Afhandlinger af N.M.Petersen* Første Del (København, 1870), pp.217 – 343.
- Prokosch, E. 1938. *A Comparative Germanic Grammar*, Baltimore.
- Ranke, F. und D.Hofmann. 1967. *Altnordisches Elementarbuch*, Berlin.
- Rask, Kirsten. 2002. *Rasmus Rask — store tanker i et lille land*, København.
- Rask, Rasmus Kristian. 1811. *Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*, København.
- . 1817. *Angelsaksisk Sproglære tilligemed en kort Læsebog*, København.
- . 1818. *Anvisning till Isländskan eller Nordiska Fornspråket*, Stockholm.

- (Geroge Webbe Dasent (trans.) and T.L.Markey (New Edition). 1976. *Rasmus Kristian Rask: Grammar of the Icelandic or Old Norse Tongue*, Amsterdam.)
- . 1818. *Undersøgelse om det Islandske eller gamle nordiske Sprogs Oprindelse*, in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger* Bind I, København, 1932.
- (Niels Ege. (trans.)1993. *Rasmus Rask: Investigation of the Origin of the Old Norse or Icelandic Language*, Copenhagen.)
- . 1825. *Frisisk Sproglære*, København.
- . 1826. *Forsøg til en videnskabelig dansk Retskrivningslære*, København.
- . 1830 a. *A Grammar of the Danish Language for the Use of Englishmen*. København.
- . 1830 b. *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue* A New Edition (Trans. by B. Thorp), København.
- . 1932. *Kortfattet Vejledning til det oldnordiske eller gamle islandske Sprog*, København.
- Robinson, Orrin W. 1992. *Old English and its Closest relatives*, Stanford.
- Rönning, F. 1887. *Rasmus Kristian Rask. Et Mindeskraft i anledning af Hundredårsdagen for hans Fødsel*, København.
- 新谷俊裕 (訳注). 1988. 『オットー・イエスベルセン：ラスムス・ラスク』、大学書林.
- Skårup, Povl. 1964. *Rasmus Rask og Færøsk*, København.
- Stenersen, Øivind and Ivar Libæk. 2003. *The History of Norway: from the Ice Age to Today*, Lysaker. (岡沢憲美監訳. 小森宏美訳. 2005. 『ノルウェーの歴史』、早稲田大学出版局.)
- Sverdrup, Jakob. 1920. "Av Sprogvidenskabens Historie. Ihre - Rask - Grimm", *Nordisk Tidskrift för Vitenskap och Industri* I, pp.459 - 77.
- Sønderberg, Olaf. 2001. *Danmarks Historie*, Århus.
- 谷口幸男. 1973. 『エッタ：古代北欧歌謡集』、新潮社.
- . 1976. 『エッタとサガ』、新潮社.
- Thomsen, Vilh. 1887. "Rasmus Kristian Rask", *Vilh. Thomsen Samlede Afhandlinger* Bind I (København/Kristiania, 1919), pp. 125 - 44.
- . 1925. "Rask, Rasmus Kristian", in: Chr. Blangstrup (ed). *Salmonsens Konversations Leksikon* Bind XIX (København), pp.937 - 39.

- Thomsen, Vilh.(Kr.Sandfeld). 1940. "Rask, Rasmus Kristian," in: P. Engelstof og Svend Dahl (ed). *Dansk biografisk Leksikon* XIX (København), pp.180 – 94.
- Thorsøe, Alex. 1879. *Den Danske Stats Historie fra 1814-1848*, København.
- Topsoe=Jensen, H. 1928. *Oehlenschläger Poetiske Skrifter* III, København.
- Traustedt, P.H. (red). 1964 – 66. *Dansk Litteratur Historie*, 4 Bind, København.
- Valfells, S. and J.E.Cathy. 1981. *Old Icelandic*, Oxford.
- Vennemann, Theo. 1994. "Dating the Division between High and Low Germanic: A Summary of Arguments" in: T.Swan *et al.* (ed). *Language Change and Language Structure: Older Germanic Languages in a Comparative Perspective*, Berlin/New York, pp.271 – 303.
- Verner, Karl. 1876. "Eine ausnahme der ersten lautverschiebung", *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* XXIII, pp.97 – 130.
- Voyles, Joseph B. 1992. *Early Germanic Grammar: Pre-, Proto-, and Post-Germanic Languages*, San Diego.
- Wimmer, Ludv. F.A. 1887. *Rasmus Kristian Rask*, København.
- 山本文明 (Yamamoto, Fumiaki). 1986. "On Rask's Old English Grammar", *In Honor of Shigeru Takebayashi* (Kenkyusha), pp.550 – 65.
- . 1995. 「Rask, Rasmus (Kristian)」, 佐々木達・木原研三編. 『英語学人名辞典』 (研究社), pp. 284 – 85.
- . 1996. 「ラスク Rask, Rasmus Kristian」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編. 『言語学大辞典』 第6巻 (三省堂), p. 1518.
- . 2005. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」『異文化』6 (法政大学国際文化学部), pp.143 – 90.
- . 2006. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——大学入学直後——」『異文化』7 (法政大学国際文化学部), pp.51 – 77.
- Zaluska-Strömberg, A. 1982. *Grammatik des Altisländischen*, Hamburg.